



1919  
S



Vertical columns of handwritten Japanese text within a blue-lined grid.

Red rectangular seal at the bottom right of the page.

東京  
庫文交外邊渡

FAS EST ET AB HOSTE DOCERI

Shuziyo Watanabe  
Tokyo.

門カ5  
號4515  
卷2

特

使鮮日記

明治八年十二月九日朝命アリ陸軍中將兼參謀  
開拓長官黒田清隆ヲ特命全權辦理大臣ト為  
シ朝鮮國ニ差遣セラルニ十七日ニ至リ議官  
井上馨ヲ特命副全權辦理大臣ト為シ同ク朝  
鮮國ニ差遣セラルノ朝命有リ前後隨行ヲ命  
セラレシ者勅任官一名奏任官十八名判任官  
十二名合計三十一名アリ其官記姓名左ノ如  
シ

- 陸軍少將種田政明
- 外務大丞宮本小一
- 陸軍中佐樺山資紀
- 外務權大丞森山茂

昭和二年  
十月二日  
購求

開拓少判官 安田定則  
 開拓幹事 小牧昌業  
 准陸軍少佐 永山武四郎  
 開拓使七等出仕 鈴木大亮  
 陸軍大尉 福田半  
 同 勝田四方藏  
 同 岡本柳之助  
 陸軍中尉 飯田俊助  
 同 野崎貞次  
 同 目賀田健  
 同 井上教之  
 陸軍少尉 磯林真三  
 同 中條弘毅

同 山本居周  
 同 益滿邦以  
 開拓使八等出仕 佐藤秀頭  
 同 松岡讓  
 外務四等書記生 石幡貞  
 同 浦瀨裕  
 外務六等書記生 荒川德滋  
 同 中野許太郎  
 開拓使十三等出仕 小寺秀信  
 開拓使十四等出仕 甘利後知  
 同 山田清重  
 開拓使十五等出仕 河田紀一  
 正院 御用掛 末松謙澄

開拓使御用係 小林可也

派發ノ官員簡點既ニ定リ開拓使出張所内ニ  
一苟ヲ開キ以テ此行ニ關スル一切ノ事務ヲ  
整理ス浦瀬荒川中野三名ハ對州ニ在ルヲ以  
テ本艦其地ニ列ルノ日詳令ヲ受ル者トス  
廿九日副大臣先發大坂ニ至リ大臣ニ神戸港ニ  
會シ同ク航セントス未松謙澄亦同ク發ス  
三十日大臣諸隨員ヲ率ヒテ冬朝陛辭ス小御所  
代ニ於テ謁見了テ祝酒英ニ物ヲ賜フ了各差  
アリ

錦三卷 紅白縮緬四匹 黒田辨理大臣  
錦二卷 紅白縮緬貳匹 井上副辨理大臣  
綴子壹卷 白羽二重貳匹 種田陸軍少將

白羽二重 各貳匹 奏任官十八名

白縮緬 各壹匹 判任官十二名

陛辭儀了テ賢所ニ參拜ス神酒ヲ賜ヒ幣物ヲ

頒與ヒラル、了如左

錦壹卷 黒田辨理大臣

錦壹卷 井上副辨理大臣

紅縮一匹 白縮一匹 種田陸軍少將

白羽二重各一匹 奏任官十八名

晒布 各一端 判任官十二名

判任官ハ謁見ナシ賢所冬拜ス

明治九年一月六日 雲八風ニ寒 夜計五二度 隨行

諸員開拓使出張所ニ會シテ大臣ノ至ルヲ待  
ツ午後一時四十分大臣諸隨員ヲ率ヒ出張所

ヲ發シ海軍省ニ到ル別ヲ送ルノ車馬絡繹絶  
ヘス既ニ省門内ニ入レハ海兵一小隊樂隊一  
分隊整列以テ待ツ大臣車ヨリ下レハ則チ海  
兵捧銃シ樂隊奏曲ス其狀肅ニシテ和ナリ大  
臣先ツ省ニ入ル須更ニシテ脚艇ヲ發シ其水  
間ヲ過キ冲鷹丸ニ移ル送別諸官ハ皆岸頭ニ  
立目送スルト久クシテ去ル三條公亦持ニ  
使ヲ發シ書ヲ贈リ以テ別ヲ告ク冲鷹丸開行  
十餘丁時干潮ニ際シ船沙洲ニ膠シテ進ニ得  
ス再々脚舟ニ移ル遇マカ根川丸ノ品海ヨリ  
歸ルニ遭フ即チ又之ヲ移リ玄武号ニ達ス時  
正ニ四時ナリ河村海軍大輔送テ本船ニ列ル  
初メ玄武号ハ午後四時ヲ以テ發シ高雄函館

矯龍諸艦ニ相繼ニ發スヘキヲ期セリ而シテ  
河村大輔高雄ニ乘シ事ヲ議スルノ間少シク  
其期ヲ緩ラセシテ請フ故ニ期ヲ過クハ少時  
其信号旗颺ルヲ認メテ乃チ發ス  
辨理大臣護送トシテ派發セラル、軍艦ニ艘  
曰日進号曰孟春号其運送船ハ曰高雄号曰函  
館号曰矯龍号ノ三艘合セテ五艘ナリ運送船  
ノ玄武号ハ大臣及ヒ諸隨員ノ乗船ニ供セリ  
日進号ハ本日同ク横濱ヨリ發シ孟春号ハ先  
夕チテ長崎ニ在リ高雄矯龍函館ノ諸艦ハ本  
艦ト同時ニ品海ヲ發ス其各艦相會スルノ處  
ヲ對州竹敷灣ト為ス各艦艦長及ヒ同乗八員  
如九

日進艦

艦長

海軍少佐伊東祐亨

上士官

十一名

准士官

六名

下士

三十三名

海兵水夫以下百八名

韓通詞

一名

通計百六十六名

益春艦

艦長

海軍少佐笠間廣盾

上士官

八名

准士官

二名

下士

十五名

海兵水夫以下三十五名

韓通詞

一名

通計八十二名

高雄丸

艦長

海軍少佐井上良馨

上士官

十三名

准士官

四名

下士

二十一名

炮兵士官

二十二名

歩兵士官

二十九名

砲兵士

六十七名

歩兵士

百四十名

海兵水夫以下百七名

韓通詞 一名

通計四百五名

玄武丸

監督 開拓使十等出仕松田時敏

船長 シ、シミット

機材方 ケ、セ、スミット

士官 八名

水夫以下 五十五名

通計六十六名

函館丸

船長 開拓使御用係蛇子末次郎

士官 拾名

水夫以下四拾三名

通計五十四名

船長

監督 開拓使十一等出仕武井半之丞

士官 五名

水夫以下 三十五名

通計四十二名

此日同雲曇々雪意アリ午後六時ヨリ雨雪霏

々午夜ニ至テ歇ム

七日 晴 風計三 寒度計五 度 午前二時相摸洋ヲ

過グ風波甚ダ險悪船頗ル動揺午後稍々穏ナ

リ

八月 晴 雲計七 風計三 寒度計五 度 午前九時淡路島ヲ

過グ風波甚ダ險悪船頗ル動揺午後稍々穏ナ



過グ波恬ナリ午後零五分神戸港ニ投錨一時  
大臣諸員同シグ上陸松鶴樓ニ投ス副大臣井  
上馨来リ會シ縣令神田孝平海軍大臣仁禮景  
範海軍少佐井上良馨海軍中佐有地品之兒来  
リ訪フ雲揚艦長海軍少佐瀧野直俊亦来リ大  
臣ニ見テ曰某頃日大坂艦ノ事ノ為ニ此地ニアリト  
雖氏大臣ノ入港ニ際シ艦内ニ在ラサルヲ以テ着港ヲ賀スルヲ  
得ス大臣ノ發令夕ニアリト聞ク恐ラクハ祝スル能ハ  
ス故ニ為ニ来リ謝ス  
午後一時三十分高雄号入港ス日進函館矯童  
ノ三船ハ未夕影跡ヲ見ス  
明日午前二時ヲ刻メ本港ヲ發セントス而メ  
副大臣議スル所アリ乃チ午前七時ニ決シ之

〇玄武号船長ニ通知セシム  
隨員中ノ公私信書ハ開拓使ヲ經由シテ達ス  
ハキノ規ナリト雖氏海軍諸員ノ衆多ナル或  
ハ紛亂ノ弊ナキ能ハザルヲ以テ佐藤秀頭ヲ  
シテ仁禮大佐有地中佐井上少佐ニ告シメテ  
曰此行海軍諸員公私一切ノ書信ハ直チニ其  
本首ヲ經テ贈答往復スト聞ケリ果シテ然ラ  
ハ極ラ良シ他日ノ詭語ヲ防ガン為メ更ニ之  
ヲ質スト大佐曰ク謹テ教ヲ領スト一行皆船  
ニ上ル  
九日 雲三風ニ寒暖計六五度午前七時船將ニ發  
セントス副大臣ノ到ルヲ待ツ七時十分副大  
臣来ル同三十分起錨天氣晴朗ニシテ海面平

カナリ午後三時三十分阿島ヲ過ク燈臺察附  
属船ヲゴロ号此ニ碇泊シ三國丸ハ兵庫ニ向  
テ駛ル帆腹風ヲ孕ミ緑波波瀲ヲ為ス無敵ノ島  
嶼水艦ヲ迎テ又送ル只其島嶼ノ縣避スルヲ  
見テ艦ノ前進スルヲ覺ヘス午後六時細雨霏  
々

十日 雲九雨二寒 夜計 六二度 午前八時周防灘ヲ

過ク傍近諸山銀色眩然タリ夜來寒甚シク已  
ニ雪ト為ルヲ知ル同九時四十分馬關ニ碇泊  
ス後雨又降ル副大臣上陸南南部町徳永号ニ  
投ス同十時三十分大臣及諸隨員上陸シ東南  
部町豊永号ニ投ス安田少判官小牧幹事鈴木  
大亮ハ事務ヲアハアリテ午後零四十分ニ至

三上陸ス諸員ヲ上陸スルニ臨ミ大臣令シテ  
日各負其課長ニ告ケスシテ振リニ他出スル  
コトヲ禁メト大坂丸乗組海軍少尉渋谷直武同  
王計副荒井勝利訪問ス午後十一時大臣及ヒ  
諸隨員盡ク帰艦セリ

十一日 雲九雨計 三〇七六 寒 夜計 五二度 午前二時ヨ

リ西風漸ク烈ク飛霰時ニ降ル神戸ノ電報ア  
リ白日進艦及函館号昨夜當港ニ碇泊シ橋龍  
丸ハ本日午前七時入港セリト  
玄武号ノ暫ク此ニ碇泊セルハ素ト副大臣ノ  
請求ニ出ツ昨夕既ニ起碇ノ機アリ然ルニ日  
進函館橋龍ノ三船風波ニ阻セラレ未タ達シ  
得ス對州ニ前往シテ之ヲ待ンヨリ寧口此ニ

在テ電信郵便ヲ以テ聲息ヲ通スルニ如カス  
ト議決シ先ツ其時間ヲ期シ四時過レハ即チ  
發程未定ハ然レテ風雪亦甚シク波浪モ亦險  
悪乃チ再々期ヲ延シ明日午後二時ノ投錨ト  
ス

十二日 雲三風一寒暖計四五度夜來雪積ルヲ數  
寸日光映射シテ一段ノ景致ヲ添フ午前十時  
三十分ケケプロテン、セーラムス上陸セラ龜山八幡  
ニ到リセキスタントヲ以テ緯度ヲ測ル諸官  
往テ之ヲ觀ル午後一時歸艦午前十時三十五  
分高雄光對州ヲ指シテ通過ス既ニシテ雲揚  
艦入港ス曾テ沈没セシ大坂丸ノ事ヲ調査ノ  
為メナリト云フ又英國軍艦一艘ノ過ルアリ

午前十時副大臣及ヒ森山樵大丞歸艦ス神  
戶ノ電報アリ曰石炭輸積甚ク遷延シテ函館  
矯龍昨夜該港ヲ突セリ日進艦ハ今朝解纜ス  
ヘシト午後二時本艦馬關ヲ發ス天晴波穏ナ  
リ午後五時玄海ヲ過ルニ及ンテ東風漸ク烈  
ク船掀攀シ困苦甚ク午後九時高雄丸ヲ超過  
ス

十三日 雲三風一寒暖計六度 午前十時尾崎岬  
ヲ過キ同ク五十分對州竹敷灣ニ投錨ス巖原  
ヲ距ル一三三里孟春艦早ク已ニ灣内ニ在リ艦  
長海軍少佐笠間廣盾長崎縣參事渡邊徹同少  
屬大坪利晋來ル  
先是海軍少將中牟田倉之助鳳翔艦ニテ釜山

ヨリ帰り外務少丞廣津弘信ト同ク巖原ニ在  
リ乃チ小林可也ヲ遣ヒ兩大臣ノ着港ヲ報シ  
且外務四等書記生浦瀨裕同六等書記生荒川  
徳滋中野許太郎等ニ隨行ノ辭令書ヲ通サシ  
ハ午後八時十五分帰艦

午前十一時三十分高雄丸着港ス

午後一時三十分種田少將仁禮大佐榊山中佐  
有地中佐井上少佐来リ面ス既ニシテ中年田  
少將來リ大臣ト談話刻ヲ移シテ去ル

先是森山樵大丞上陸シ廣津少丞ト面議スル  
所アリテ將ニ帰ラントス適ク兩大臣ノ上陸ニ  
際シ兩舟相遇フ終ニ楫ヲ回シテ兩大臣ニ從  
テ竹敷村長崎縣士族高島才三郎ノ家ニ至ル

廣津少丞其復命書ヲ大臣ニ呈ス安田少判官  
小牧幹事鈴木大亮モ亦從テ座ニ在リ尋テ仁  
禮大佐井上少佐ヲ招キ議スル所アリ翌曉三  
時一同帰艦ス

十四日 雲ハ風一寒暖計六〇度 午前十時三十分

中牟田少將及鳳翔艦長海軍少佐山崎景則来  
ル午前十一時四十分函館丸入港午後零十分  
矯龍丸モ亦入港ス同一時四十分永山准少佐  
矯龍丸監督武井半之丞函館丸船長蛭子末次  
郎及ニ隨負陸軍士官数名来ル

河田紀一寫真器ヲ携テ上陸シ碇泊諸艦ノ真  
影ヲ寫セトモ終ニ成ラズ其製藥未夕精ナラ  
サルアルヲ以テナリ

午後七時ヨリ微雨霽時ニシテ晴ル浦瀬裕荒  
川徳滋中野許太郎隨行ノ辞令ヲ奉シテ来ル  
外務省雇韓語生徒モ亦到ル浅山顯藏中村莊  
次郎吉村平四郎阿比留祐作四人ナリ  
此夜大臣令ヲ布テ曰孟春矯龍函館ハ明日午  
前七時玄武高雄ハ同九時ヲ以テ釜山浦ニ向  
テ進行スヘシト

竹敷村ハ嚴原ノ北四里以内ニ在テ落々々々  
ニ三十戸ノ寒村ナリト雖其灣タルヤ天賦  
ノ良港ナリ灣ノ廣袤九ソ十五丁海深フシテ  
礁ナク丘山之ヲ圍ム其高サ九ソ五十尺乃至  
百五十尺ニシテ各處ノ森林松栢鬱葱タリ其  
遠ク群山上ニ秀テ硯奇嵯峨タルモノハ白岳

ナリ相對シテ楫讓レ背テ枕セザルガ如キモノ  
ハ龜坂ナリ懸崖絶壁多クシテ海ニ枕ム崖樹  
扶疎トシテ老松之ヲ點綴ス景象洵トニ美ナ  
リ然レテ地硯薄ニシテ居民業ニ苦シニ終カ  
ニ漁獵ヲ以テ生計ヲ營ム故ニ其屋舎極メテ

陋惡ナリ

十五日

雲ハ風ニ寒暖計五ニ度  
晴雨計三〇九ニ

午前七時孟春函

館矯龍契錨進往ス同九時高雄發ス本艦之ニ  
繼ク九時三十五分日進艦ノ尾崎港口ニ入ル  
ツ見ル即テ号旗ヲ以テ直テニ釜山ニ進ムヘ  
キラ令ス其艦忽テ舵ヲ轉シ旗章ヲ掲ケテ祝  
砲スル丁十九發本艦ノ後ニ繼テ進ム海路平  
穩浩敷ヨリ海門ニ至ル九ソ六海里海門東又

ル霞西南角ヲ尾崎ト云ヒ東北角ヲ牛嶋ト稱  
ス兩岬相距ル大約三海里午後二時三十分朝  
鮮國釜山浦外ニ至ル對州ヲ顧望スレハ一髮  
ノ青螺波間ニ横ハルヲ見ルミ鷓尾山於栢  
島ノ間ヲ過ノ其於栢島ノ傍ニ起リ廣高倍莖  
ニシ雜樹叢生スル者ヲ絶影島ト為ス五鹿島  
ハ鷓尾山ノ東北ニ位シ其相距ハ大約三海里  
鷓尾終栢ノ間ヲ過レハ即テ釜山浦ナリ鷓尾  
山ノ西北緒ニシテ低下ナル處ヲ龍塘ト稱ス  
本艦漸ク近ツクニ及シテ一條ノ烽烟其山腹  
ニ聳ルヲ見ル蓋シ警報ナルナリ該國從來異  
株船ヲ海岸ニ近ツクヲ見レハ烽火ヲ舉ケ諸  
道之ニ應シ以テ京戒ニ達スト云

近テ湾内ニ入レハ艦頭粉壁瓦屋ノ參差松樹ノ陰  
森々ルヲ見ル即テ我公館ナリ午後二時五十分  
錨ヲ下ス矯龍高雄ハ先ツテ投錨セリ諸艦ノ達  
スルハ相後ル、丁二十四五分ノ差アリ鳳翔艦モ  
項目對州ニ滯泊セシガ昨日此ニ來ル滿珠丸ハ外  
務省ノ雇フ所ニシテ久ク此地ニ往來スル者今適  
ニ港内ニ在リ於是汽船合計八艘各自日旗ヲ飄  
ス館内ノ盛觀近古未曾有ナリ湾中諸所ニ韓船  
散布セリ我諸艦錨ヲ投スルニ及テ或ハ近ツキ  
或ハ遠サカル大中小不等ナリト雖其製皆  
同シ船身ハ粗大ノ木板ヲ用ヒテ甚タ劉磨セ  
ス木釘ヲ用ヒテ寸鉄ナシト云フ小大共ニ猛船  
ヲ以テ之ヲ呼ブ聞ク該國更ニ戰艦ナシ平時

ハ之ヲ農高ニ寓シ一朝事アレハ之ヲ用ヒテ  
敵ニ當ル全國ノ漁高船舶ミナ目シテ兵船ト  
為ス以テ其調發指顧ニ辨スト  
望遠鏡ヲ取テ沿岸ヲ周覽スルニ蕃草梁豆毛  
開雲諸部落ノ土民黃白ノ旗ヲ建テ一隊ニ三  
十人各零ニ屯集スル者釜山城ノ左右ニ及フ  
而メ守門際門近傍奔走スル者最モ多シ  
韓船時々本艦ニ近ツクヲ觀ルニ其骨相容儀  
稍清國人ニ似テ衣冠ハ之ト異ナリ服上衣下  
裳アリ男女共ニ同シ皆白布ヲ以テ裁縫シ袖  
窄クシテ長ク指頭ヲ掩フニ至ル襟ハ深ク縫  
ヲ右ニ鉤シ裳ハ闊大ニメ屈伸自由ヲ得間々  
衫ヲ製フモノアリ多クハ青紺色ハ單布ヲ用

テ作り胸背ヲ覆ヒ腰下ニ至リテ縫綴セス袖  
大ニシテ膝ニ至ル蓋明服ノ遺製ナラン髮ハ  
冠スルト否トヲ以テ之ヲ異ニス冠スル者ハ  
結束シ未夕冠セサル者ハ頭ノ中央ヨリ左右  
ニ分割ス冠ノ状ハ東坡笠ノ如ク疏布網ノ如  
キ物ヲ以テ作ル精巧ナルト蟬翼ノ如シ色ハ  
盡ク黒シ小民ハ只白布ヲ以テ頭顱ヲ纏ヒ耕  
耘ニ就ク雨天炎暑ト雖モ隈リニ傘笠ヲ用フ  
ルナレ國ニ定制アリト云フ  
午後五時三十分兩大臣及ヒ隨行奏任諸官負  
上陸乃チ諸艦長ヲ會シテ江華口ニ開行ノ時  
宜ヲ議スル左ノ如シ  
釜山ヨリホル子ル島ニ至ルノ距離大約四

百三十海里ナルヲ以テ日進孟春函館矯龍  
ノ四艦ハ其速力每一時間五里平均トシテ  
算スレハ八十六時間ニシテ達スヘシ玄武  
高雄ノ兩艦ハ八里平均トシテ五十三時間  
ニ達スルヲ得其差三十二時二十分トス故  
ニ日進孟春函館矯龍ハ本月十七日正午十  
二時玄武高雄ハ十八日午後九時二十分ヲ  
以テ鍋ヲ抜キ江華島ニ向ヒホル子ル島ニ  
於テ諸艦相會シ而ル後孟春艦ハ路ヲ江華  
島北口ニ取リ府ニ至ル水路ノ測量ヲ為シ  
其帰報ヲ待テ航程ヲ定メ以テ進往ス可シ  
其時宜ニヨリ各船ノ突往些少ノ延縮ヲ生  
スルハ害ナシトス

日進孟春函館矯龍四艦ハ雨風ノ都合ニヨ  
リハミルトン島臣文ニ廻避スルアルヘ

全選道西南洋ノ孤島ナリホル子ル島ハ  
東經大度零三分七度ニ  
北緯大度零三分七度ニ  
約百二十度ニ至ル  
南陽府ニ屬スル  
大度零三分七度ニ  
北緯大度零三分七度ニ  
約百二十度ニ至ル  
南陽府ニ屬スル  
大度零三分七度ニ  
北緯大度零三分七度ニ  
約百二十度ニ至ル  
南陽府ニ屬スル

種田少將仁禮大佐祥山中佐有地中佐亦未ラ  
與リ議ス議畢ラ諸艦長皆散ス兩大臣及ヒ諸  
隨員ハ夜半艦ニ歸ル

此日大臣館長代理外務四等書記生山之城祐  
長ヲシテ別差ノ就館ヲ促シ我兩大臣既ニ艦  
隊ヲ率ニ京畿道江華島ニ向テ進往アリ宜ク  
之ヲ貴國京城ニ轉致スヘシト告シメ乃チ其



口陳書ヲ進カシム

十六日 雲ニ風一寒 夜計四五度 大臣將ニ政府ニ

具狀稟報スル所アリシトス 隨員ヲシテ文書

ヲ整理セシム 又諸艦乗組人員ヲ調査シ書記

生一名及ヒ韓語通辭四名ヲ各艦ニ配附ス

十七日 雲五風一寒 夜計四二度 午前一時諸員整

理スル所ノ稟報文書成ル小寺秀信ヲシテ之

ヲ齎ラシ滿珠丸ニ乗テ馬關ニ赴カシム

正午十二時日進孟春函館橋龍ノ四艘江華ニ

發往スルニ臨ニ各巨砲十余發以テ海戰演習

ヲ為ス是日亦沿岸處ニ彼國人ノ聚散陸續

タルヲ見ル

副大臣及ヒ森山樵大丞安田少判官小牧幹事

鈴木大亮等上陸シ日暮帰艦

十八日 雲八風一寒 夜計四二度 午前十時大臣森

山樵大丞ヲ率テ上陸シ正午帰艦

午後三時三十分仁禮大佐井上少佐来リ大臣

ニ告別シ五時起錨シテ發往ス是夜雨霰降り

風浪高シ十二時後ニ至テ収ル

十九日 雲二風一寒 夜計五三度

二十日 雲一風一寒 夜計四六度 午前十時三十分

大臣及ヒ森山樵大丞安田少判官鈴木大亮上陸

シ野戰砲及ヒ短銃ノ試験發放ヲ為シ正午帰

艦是日外務少丞廣津弘信病ヲ以テ隨行ヲ辭

シ午後上陸セラ帰航ノ便ヲ冀ツ

滿珠丸昨夜帰航ノ期ナリシニ今朝ニ至リ猶

未タ其影跡ヲ見ス因テ大臣屢々入ヲシテ絶  
影島上ニ登テ之ヲ望ミシハ猶見ルナレ是レ  
カ為ニ本船モ亦開行進往スルヲ得ス皆領ヲ  
交テ之ヲ待ツ此間無事故ニ近傍風土民俗ヲ  
詳悉スルヲ得タリ

此港ハ朝鮮八道中ノ一良港ニシテ港口東南  
ニ向ヒ直徑大約三里於栢島周回九ソ一里有  
半西岸ニ六七ノ人家アリ絶影島ハ其西ニ起  
リ裾ヲ公館前頭ニ曳ク周回九ソ七里高サ九  
ソ三百尺古來牧馬多キヲ以テ對州人只牧ノ  
島ト稱セリ實ニ我日本公館ト相對ス

和館ト稱スル者嘉吉年間三所ニ在リ曰ク東  
萊郡釜山浦曰ク熊川郡乃而浦曰ク蔚山郡塩

浦壬辰變後ハ只釜山一處ノミ其後我ヨリ數  
々館ヲ移サシメテ請ヘトモ肯シセス寛文十  
二年ニ至テ始メテ和館ヲ草梁項ノ地ニ定ム  
延寶六年新館落成ス今ノ公館是レナリ  
館ノ地内一小丘アリ松樹繁茂ス畧スルニ石  
垣ヲ以テラス高サ五六尺厚サ二三尺不等以テ  
其三面ヲ圍ミ只港口ニ面フ一方ヲ缺キ以  
テ出入ヲ便ニス釜山ニ出ル一路門ヲ設ケテ  
守兵ヲ置ク其他二三ノ通辨官輪直ス乃チ古  
來ノ定制ナリ石垣内約六万坪餘其公務ヲ措  
辨スルニ係ル屋宅ハ政府ヨリ之ヲ建造シ道  
路蕪穢スレハ其人民ヲ役シテ掃除ス其他在  
館官負ニ柴炭ヲ饋送スル等ノ古例規尤モ多

今此ニ贅セス  
館内石垣内ヲ總稱公私家屋数十字アリ而ラ  
一字ノ大ナルモ之ヲ数戸ニ分テ官民共ニ  
居ル方今在勤ノ外務省官員三名四等書記生  
山之城祐長同七等書記生尾間啓二同住永辰  
安医員一名高田英策及ヒ語學生徒二名仕下  
三名小仕二人而シテ居留商民七拾余人アリ  
公廳ハ小丘ノ半腹ヲ占據シ儼然一廓ヲ為ス  
丘上辨天金刀毘羅ヲ安置シ丘ノ高サ約一百  
尺古松暢茂シテ鬱葱タリ丘ノ西ニ空屋数棟  
アリ三大廳六行廊ト稱ス今棟ノ維新以前  
宗氏家臣ノ住スル所ナリ之ヲ過ル数丁ニシ  
テ寔席門アリ外廓ノ右垣ト相接ス門外ニ一

大厦アリ寔廳ト稱ス古來談國官吏宗氏ノ  
便臣ヲ饗スル所ナリ廳ノ左右ニ家アリ扉外  
此ノ如キモノ四戸伏兵廊ト云フ其政府ヨリ  
館内ノ非違ヲ警シ為メ設クル所ナリ  
船倉ニ接スル一丘海ニ突出シ岩間古松逆生  
レテ絶影島ト一衣帶水ヲ隔テ稍竒趣ヲ為ス  
者ヲ龍尾山ト云フ俗ニ呼岬ト稱ス頂ニ小祠  
アリ清正ヲ祀ル海岸ニ浴ヒ守門ヲ出テ東北  
スルト二十丁許支給所アリ二岳アリ彼我ノ  
罪人ヲ刑スル處  
道左ニ瓦屋数軒アリ即チ訓導別差ノ任所ナ  
リ對面ノ華堂一區ヲ為スモノ大東館ト云フ  
宗氏親ヲ往テ殿拜ノ禮ヲ行フ所ナリ殿拜之  
禮  
スヲ畧 重門兩廡アリ寧遠門控海門ト云フ近時

頗ル粉飾ヲ加フヲ以テ遠望稍美ナリ距ル  
数丁又畫スルニ石壁ヲ以テシ高サ山頭ニ至  
ル行路ニ門ヲ設ケテ譏察シ此ヨリ以内日本  
人民ヲ入レス之ヲ設門ト云フ昨春秋彼岸及  
ニ中元節ニ踰テ以テ古館ノ基趾ニ踵リ其  
祖先ノ墓ニ展スルヲ得ルノ墓ニ展スルト  
モテ其行非スモ我商民此名ヲ籍テ其墳墓ヲ  
時ヲ然リト遊歩期程外ニ出ルハ只此設門外ノ  
一村坂下ト云ヒ少シク隔ワテ同シク灣ニ傍  
フ聚落ヲ古館ト云フ此ヨリ陸路開雲豆毛ヲ  
經テ釜山ニ至ル釜山城我公館ヲ距ル丁大約三里強ニシテ  
兩山間ノ一小丘ニ據リ海ヲ控ヘ街ヲ前ニス

繞ラヌニ二重石壁ヲ以テス僉使此ニ居ル高  
氏凡ソ二千家アリト雖モ甚タ蕭寂タリト云  
フ東萊府ハ又二里ノ北ニアリテ市街凡ソ五  
千戸ナリト云フ其山ハ九德天馬鷓尾四明等アリ皆頑石磊砢  
トシテ杉檜豫章等ノ美材ヲ見サルハ勿論榛  
栗樗叢ノ薪炭ニ供ス可キモノト雖モ亦甚タ  
乏シ從來輸出スル所ノ物産ハ虎豹皮、熊皮、犬皮、綿  
布、鱈鱉、北魚、牛皮、牛角、牛馬骨、牛毛草、海羅、人參、  
熊膽、黃芩、牡丹皮、山茱萸等ニシテ我邦ヨリ買  
易スル物品ハ銅、陶器、明礬、紅絹、海氣、砂糖、菓子、  
素紙、葛、紅粉、唐木綿等ナリ往年宗氏ニテ此質

易ヲ管理セシ時ハ毎年三十萬圓ノ輸出入アリ  
而シテ維新以後衰耗シテ大畧十餘萬圓ニ  
止ルト云フ

午後三時公館へ準備スル所ノ野戰砲二門共  
ニ彈藥七十發ヲ本館ニ移シ積ム

夜來微雨アリ曉ニ至テ晴ル

廿一日 雲ハ風ニ寒暖計五ニ度 滿珠丸未タ來ラ

ス諸負尤モ無聊ナリ館人來テ鯉魚ヲ賣ル長

サ三尺余巨鱗細口淺刺タリ釜山近傍ノ一大

沼ニテ獲ル所ト云フ味最モ美ナリ公館ノ西

南海岸ニ突出スル山ヲ天馬峰ト名ツク其麓

ニ二村アリ嚴南屬民洞ト云フ 對州人皆之ヲ

麴藥ヲ數百余アリ量セトシテ 二村ヲ距ル數丁

許ニシテ捕魚ノ梁アリ 亦是トテ設クニモ 長サ一

二丁杭標シテ船舶ノ妨碍ヲ防ク其捕魚ノ尤

多キニ當テハ夜間無數火ヲ點シ鼓ヲ過テ鉦

ヲ鳴ラシ以テ喧鬧ヲ極ムト云フ亦奇ナリ

午後一時ヨリ陰雨冥濛タリ

廿二日 雲九風ニ寒暖計五ニ度 曉來船窓ヲ開ラ

ッハ東萊近傍ノ諸山玉ヲ數キ銀ヲ積ム雪景

頗ル佳ナリ

此日江華島ニ於テ朝鮮國官弁應接ノ事宜ヲ

擬立スル丁左ノ如シ

一江華島到着ノ上ハ脚艇ヲ發シ隨員中ヲ

江華府ニ簡派シ府使ノ面接ヲ乞ヒ口陳

書ヲ以テ大臣ノ來着ヲ報スヘシ府使若

レ面接ヲ肯ンセザルハ書翰ヲ以テ之ヲ  
扱スヘシ彼ノ官員先ツ来ッテ我意ヲ問  
フニ於テハ隨員ヲ遣シ日進艦内ニ應接  
スヘシ其應接ノ人ハ特ニ大臣ノ指令ヲ  
受ケレ者ニ限ルヘシ

一大臣上陸ノ期ニ至ラハ各艦ノ脚艇ヲ棹  
メ先ツ儀仗兵ヲ遣リ岸上ニ整列セシメ  
然ル後大臣上陸アルベシ其祝砲ノ發不  
發ハ時機ニ因ルヘシ

一大臣應接ノ場所ヲ警衛スルハ儀仗兵ノ  
規式ニ準スヘシ

一機立スル所是ノ如シト雖モ現地ノ形况  
ニ依リ或ハ変更スルコトアルヘシ

一江華島ニ在テ彼ノ官弁未訪ノ時之ヲ日  
進艦ニ接待スルニ於テハ豫メ該艦ニ和  
所ヲ接待所ヲ設ケ置クヘシ彼ノ官弁若  
シ他艦ニ近ツクモ一切其乗艦ヲ拒ミ日  
進艦ヲ指示シ直チニ信号ヲ以テ同艦ト  
玄武丸トニ報スベシ玄武丸ハ報ヲ得テ  
即チ委員ヲ派シ以テ應接セシムヘシ日  
進艦ハ其委員ハ未タ来ラサル時間彼ノ  
官弁ヲ其和所ニ待タシムヘシ彼官弁ノ  
未ル衆多ナリト雖モ同時ニ五名以上乗  
艦スルヲ容ルスヘカラス且帶劍ノ外兵  
仗ヲ携フヲ禁シ茶或ハ酒ヲ饗スル等臨  
時委員ノ適宜施行ニ任スヘシ

午後五時大臣官本小一ヲ率テ上陸シ中牟田  
少將ヲ訪ヒ鳳翔艦ヲ馬關ニ派遣セン一ヲ議  
ス尋テ副大臣ヲ迎ヘ其議了結シテ同ツ七時  
歸艦

廿三日 晴雲七風二寒暖計五九度 午前七時鳳翔艦  
士官來ル同艦ヨリ遞送セント擬スル文書午  
後零十分成ル即テ小收幹事鈴木大亮ヲシテ  
齋ラレ行テ之ヲ托セシム該艦ハ馬關ニ於テ  
電機ヲ以テ政府ノ稟裁ヲ取リ再々大臣ノ所  
在ニ復命スル指令ヲ受タリ故ニ他日ノ便ヲ  
計リ公館ニ在留セル外務省雇韓語通辭竹田  
邦太郎ヲ附從セシム廣津私信亦該艦ニ乘シ  
テ歸朝ス

午後一時本船先ツ釜山浦ヲ投錨ス鳳翔艦モ  
亦碇ヲ發シ東西航路ヲ異ニス海波穏ナルヲ  
以テ進行最モ迅疾ナリ

廿四日 晴雲八風二寒暖計四五度 午前二時巨文島

ヲ過キ同七時濟州島ヲ約東南二十海里ノ間  
ニ認ム此島ハ朝鮮南洋中ノ最大島ニシテ周  
廻二百七十里アリ全島一山高ク雲霄ニ  
聳フ漢拏山下云フ邦内三高山ノ一ニ居リ六  
千五百五十八尺アリト云フ白雲冷籠トシテ  
波濤ノ上ヲ照ス頗ル佳眺ナリ

廿五日 晴雲八風二寒暖計三四度 午後二時漸クホ

ル子ル島ニ近ワク此間島嶼甚ク多シ遙カニ  
日進高雄孟春函館瑞龍ノ五艦ヲ淡靄中ニ認

テ進行ス高雄附屬小瀬船出テ、水ヲ近岸ニ  
求ムルニ過フ午後三時十分「ホル子」島傍ニ  
投錨ス種田少將仁禮大佐樺山中佐有地中佐  
永山准少佐陸軍武官及ヒ諸艦長即時來リ賀  
ス此夜隨行諸官儀仗兵及ヒ護衛艦ニ布令ス  
ル丁左ノ如シ

一朝鮮國官員接待ノ時ハ勿論平常各禮節  
ヲ嚴ニシ該國人ニ對シ傲慢放肆ノ舉動  
アリ其輕侮ヲ來シ我國體ヲ辱シメサル  
為メ堅ク左ノ條款ヲ遵守スヘシ  
一諸艦乗組人員ハ總テ其上官ノ指令ナク  
擅ニ上陸スヘカラス  
一道路ニ徘徊放歌シ又ハ往來ノ人ニ對シ

無禮ノ舉動且ツ其妨碍ヲ為ス可ラス

一猥褻ニ人家ニ入り又ハ門牆ヨリ窺視ス

ヘカラス

一市店ニ於テ飲酒スヘカラス

一婦女子ニ對シ調戲指笑スヘカラス

一賣品タリテ彼レノ欲セサルヲ強求シ或

ハ其價格ヲ爭論スル等ノ事アル可ラス

一社寺墳墓等國人崇奉ノ地ニ於テ無禮ノ

所為アル可ラス

一田畝ヲ踏藉シ又ハ竹木等ヲ折リ取ル可

ラス

一銃獵ハ勿論妄リニ発砲スヘカラス

一海兵ハ特ニ大臣ノ許可ヲ經ルニ非サレ



ハ上陸スヘカラス水火夫上陸ノ前ハ取  
締リノ為メ士官ヲシテ附添シムヘシ  
此夜大臣ヨリ玄武丸船長シ、シミット船長ニ  
船長シ、エム、ブルーン及玄武丸機障師セ、エム  
シミット等ニ書ヲ贈ル其文意左ノ如シ  
今般拙者朝鮮國へ奉使ニ甘嚴冬ノ際至難  
ノ航路盡カノ段感謝スル所ナリ然ニ此後  
江華島ニ進ミ同國政府へ談判中萬一彼ヨ  
リ暴挙ニ及フ節ハ不得止相當ノ防禦ヲ為  
シ國旗ヲ保護セザルヲ得ス其機ニ至リ貴  
下身上ニ不慮ノ儀アル時ハ貴國政府ニ對  
シ不相濟次第ナリ就テハ右等ノ場合ニ於  
テハ貴下ノ事務士官ノ内ヨリ代理不若ニ

ヨリ危險ノ地ニ臨マサルヲ要ス  
又セ、エム、ブルーンニ贈ル書アリ其文畧同モ  
ト雖モ但此人今擔當專任ノ事務ヲキテ以テ  
貴下ノ事務代理ニシテ、語ヲ省クノミ其翌各  
答書ヲ呈セリ、ブルーン及「シ、エム、ブルーン」ハ  
唯其意ヲ領スル旨ヲ言ヒ「セ、エム、シミット」ハ  
大臣ノ厚誼懇到ヲ謝シ危險ニ臨ムト雖モ其  
身ヲ顧ミスカラズ盡スヘシト但未段不慮ノ儀  
云々ニ至テ若シ此禍ニ罹ルアレハ其處分如  
何結局アルベキヤ心ニ關スルハ尤モ是ニア  
ル由テ陳ズ獨リ「シ、シミット」ノ答辭人ヲシテ  
感動セシム曰ク時ノ治亂ニ關セス貴政府ニ  
犬馬ノ力ヲ盡サシト歎スル、其某ノ宿志ナレ

ハ其職掌上ニ於テ性命ヲ玉直スルハ敢テ惜  
ム所ニアラス厚誼ノ辱キヲ排スト雖モ亦自  
ラ素志ニ背カサランコトヲ是務ムト  
此夜大臣仁禮大佐ヲシテ令ヲ傳シム曰ク江  
華島邊測量ノ為メ禰龍丸ヲ江華島北口ニ孟  
春艦ヲ江華島南口ニ羽廿六日午前七時解纜  
スヘシ其潮候ニヨリ少シク此時限ヲ延縮ス  
ルモ害ナシトス

廿六日 晴 雲ハ風ニ寒 夜計三〇度 拂曉孟春艦將ニ

突セントス而シテ高雄丸附属ノ小漁船昨日  
淡水ヲ需メシ為メ迎岸ニ往ク之ヲ待トモ帰  
ラス偶々高雄丸ノ士官脚舟ヲ以テ日進艦ニ  
至ラントシテ退潮ニ引カレ數里外ニ漂流セリ

是ニ於テ孟春艦ハ江華へ發航ヲ止メ彼ノ小  
漁船ト脚舟ヲ扶ケン為メ八時四十分其方向  
ヲ異ニシテ突シ午後三時漸ク兩舟ヲ曳テ本  
所ニ還ル潮流ノ湍急ナル以テ推知スヘシ蓋  
シ「ホル子」ル島ハ周廻三丁許高サ僅ニ五十尺  
ニ過ス土楮ク頭禿ニシテ草木ナシ如ルニ此  
近海潮汐ノ干満甚シク二丈四尺ノ差アルニ  
至ル是ヲ以テ波浪怒激シ海水常ニ混濁ニメ  
清ム時ナク勢ヒ船船ヲ漂蕩ス誠ニ注意スヘ  
キ所ト為ス  
午前七時禰龍丸將ニ突セントス副大臣安田  
少判官ケプラン、セー、ムス等ト共ニ脚船ヲ下  
シ之ニ乗ラントス時正ニ退潮ニ際シ濁浪洶

湧漕進スル丁能ハス矯龍丸ヲシテ本艦ニ近  
ツカシメ綱ヲ投シテ以テ其脚艇ヲ曳キ辛シ  
テ達スルヲ得ル九時十五分江華島ニ向テ進  
往ス種田少將永山准少佐亦同シク此舟ニ乗  
リ去ル昨夜大臣ノ種田等ニ命スルニ矯龍艦  
ニ来リ江華ニ赴クヲ以テスルヤ種田稟シテ  
曰ク韓人頑固心事測リ叵シ若シ我艦ノ進口  
ヲ拒ミ委リニ砲撃ヲ加フル有ラハ之ヲ覆ス  
ル如何シテ可ナラシ大臣曰百方之レヲ避ケ  
速クニ帰報セヨ種田曰敬シテ命ヲ領ス人我  
カ頭ヲ打ツモ我兵ニ抗セサランノミ大臣曰  
此行ヤ當ニ是ノ若クナルベシ然トモ万已ム  
ヲ得サルトキハ臨機ノ處分ヲ為スヘシ

仁禮大佐ヲシテ明日南陽仁川等沿海ヲ測量  
スヘキ旨ヲ詔館丸ニ達セシム

廿七日 雲ハ風ニ寒暖計四五度 午前七時三十分  
晴雨計三〇八ニ

孟春艦江華南口ニ發往ス榊山中佐益満少尉  
及柴山大尉小笠原中尉等亦同ク發ス

十時函館丸發シテ南陽ニ向フ「ケ」アレン、シミ  
ット「」伊東少佐福田勝田二大尉松岡謙荒川徳  
滋其利後知等同乗セリ

十時三十分韓船二隻アリ「」ホル子「」島傍ニ到  
ル日進艦ニ近ツキ一封ノ書ヲ呈ス士官受テ  
之ヲ開封ス其表面書式左ノ如シ

資奉物目

封中書目左ノ如シ

	白米	五石
	牛	壹頭
	猪	五口
	鶏	二十首
	醬	壹壺
	酒	三壺
南陽府地方官姜		

日進号ハ乃チ士官ヲメ齎奉書目ヲ携ヘ来リ  
 大臣ニ報セシム。於是官本大丞小牧幹事接待  
 ノ命ヲ奉レ通辨浦瀬裕ト往テ南陽府使姜潤  
 士人金鍊五書記官一人ヲ延テ船ニ上ラシム  
 彼日過日未既ニ持接セント欲スレト風浪ニ  
 阻テラレ意外ノ遅延請フ之ヲ怒セヨ敢テ問  
 フ貴下等何國ヨリ来リ那邊ニ赴カント欲ス  
 ルヤ且各艦乗客幾許ナリヤ此地方ニ来泊ノ  
 諸船ハ余輩職トシテ必ス其来由ヲ問ヒ上司  
 ニ報セサルヲ得ス願クハ指示セラレヨ我曰  
 大日本國ヨリ貴國ニ差遣セラレタル黒田并  
 上両大臣一行ノ船艦ニシテ其乗組人莫ハ每  
 船大凡五六百人ナリ府使曰曾テ来泊セシ船

艦ノ内三隻ハ既ニ解纜セリト聞ク知ラス何  
地ニ赴キレヤ且貴國大臣何等事故アリテ此  
ニ来ルヤ我日ニ隻ハ江華近傍ニ至リ一隻ハ  
淡水ヲ需メン為メ近岸ニ赴ケリ大臣派遣ノ  
件ハ前既ニ我官負ヲ以テ釜山ヨリ東萊府使  
ヲ經テ貴朝廷ニ報シタレハ貴國ノ領知スル  
所ナルヘシ然メ今此ニ泊セリ請フ貴下亦速  
ニ之ヲ京城ニ報セラレヨ今種々ノ物品目錄  
ノ如ク賚贈セラレハ厚意謝スルニ辭ナシ  
雖然我諸艦幸ニ缺乏ノ憂ナケレハ之ヲ受ル  
ヲ欲セス請フ其意ヲ領セヨ聞ク貴國昨今新  
年ニ際セリト國王殿下及ヒ大院君ヲ始メ六  
曹百官皆無事ニ越年アラレシヤ國內モ泰平

無事ナルヤ彼曰然リ我曰謹テ奉賀ス我  
天皇陛下モ安寧ニ超歲致サレタリ彼曰恭ク  
奉賀ス我曰今般汎来ハ大臣ハ我國至重ノ大  
臣ニシテ古来斯ル重大ノ使節ヲ外國ニ派出  
セラレタル例甚タ少シ本大臣ハ乃チ本官陸  
軍中將ナルヲ以テ麾下ニ属スル軍伍最モ多  
ク殊ニ内閣ノ重任ヲ兼子加ルニ我邦北部ニ  
於テ概子貴國疆域ノ半ニ及フノ大地方ヲ總  
轄シ以テ開拓事務ヲ掌管セラルハ人ナリ  
姜之ヲ聞クヤ遽然恭敬ノ意ヲ表シテ曰貴國  
大臣江華ニ来貴アリテ我大臣迎接面議ノ上  
使事ヲ了セラレナラン下官直ニ本日持賂ノ  
委曲ヲ上司ニ申シ轉シテ京城ニ稟報セハ不

日再々京師ヨリ公然問情官ヲ差遣セラルハ  
トアルハ我日問情官来リ接セラルトハ  
甚タ欣フヘシ但他船ニ餘室ナケレハ必ス直  
ラニ本艦ニ来臨アルヘシ敢テ江華府留守ノ  
姓名ヲ問フ曰趙秉式曰我大臣ヲ迎接スヘキ  
貴國大臣誰トカ為ル曰知ラス曰兩國大臣ノ  
未タ親接面議セサル先ニ我カ五六隨員ヨリ  
貴國官弁ニ照會シテ商議ニ及フヘキナレハ  
今其姓名官位ヲ書シテ豫メ交付セントス是  
ニ於テ官本森山安田小牧鈴木五人ノ本官姓  
名ヲ詳記シテ與フ姜謝シテ之レヲ領シ而テ  
其物品ヲ收受セラレンヲ求ムルハ甚タ切ナ  
リ我終ニ受ケス去ルニ臨テ艦内ヲ一覽セン

トテ請フ船官煩炮彈丸諸器ヨリ運轉機解ニ  
至ルマテ一々指點シテ之ヲ眺スニ賞歎ノ色  
アリ午後二時辞シテ還ル  
午後七時四十分速岸ニ篝火ノ如キモノヲ見  
ル詳ニ其方位ヲ考ルニ「ホル子」島ヨリ正東  
ニ數點アリ北位大九二十度ニ方リタル處ニ  
モ亦見エ皆水煙中ニ隱見ス  
廿八日 晴 雲ニ風一寒 霞計四六度 日暖ニ氣暢フ此  
處ニ投錨以來瘴煙迷濛今日ノ如キ快晴アラ  
サルナリ  
午前九時仁禮大佐来リ海兵一小隊ヲ近島ニ  
上陸セシメント請フ之ヲ容ル  
午後七時十分函館丸回ル其測量及ニ探水ノ

始未左ノ如シ

廿七日午前十時ニ抜錨シヨイムペラジリ  
セ湾ニ向フ其間深淺ヲ測量シ午後四時進  
テ大阜島ノ北側ニ投錨シ直チニ三隻ノ脚  
舟ヲ下シ甲ヲ東北乙ヲ南丙ヲ東ニ分派シ  
テ淡水ヲ探ラシム甲ノ乗組勝田大尉松岡  
讓蛇子末次郎荒川徳滋甘利後知等仁川府  
管下五里洞ニ上陸シテ居民ニ問フニ淡水  
ノ所在ヲ以テス居民三十五六人驟カニ集  
リ之ヲ擁護シテ其家ニ入ラントヲ忌避ス  
ルモノ、如シ乃チ導ラ田畝ニ至リ泥水ノ  
畝間ニ在ルヲ指シ且自ラ飲テ以テ衆ニ示  
ス然レモ其水混濁汚穢飲料ニ供スヘカラ

五里洞ノ地タル仁川府ヲ距ルト九ノ三里  
丘山東北西三面ヲ繞リ松樹風爽タリ戸数  
凡ソ三十余アリ時正ニ新年ニ際スルヲ以  
テ居民多クハ酣醉泥ノ如ク我諸士ノ腰ニ  
寸兵ナキヲ見テ侮リ遊ソキ鬚髮ヲ撫摩シ  
衣服ヲ牽引シ動モスレハ袖袋ニモ手ヲ入  
レ撈ラントス其舉止尤モ無状ナリ  
丙舟ノ上陸セシ地方ニテモ醉漢甚々多ク  
我水夫等ヲ見テ或ハ逃散スルアリ或ハ突  
然大聲ヲ發シテ恐赫セントレタルモアリ  
シト云フ

乙舟ハ南陽府下大阜島ノ鐘縣洞ニ上陸ス

居民之ヲ待ツト甚々厚ク海岸ニ毛氈ヲ敷  
キ以テ休憩所トシ為ニ傍近ノ滾々タル流  
泉ヲ示シ辭氣ヲ降シテ禮遇シ夜ニ入り艦  
ニ歸ルニ臨テ數人提燈シテ之ヲ送レリ前  
ニ所土人ノ所遇ト大ニ霄壤セリ風俗ノ淳  
漓ニ依ルカ將タ官吏ノ能否ニ関ルカ是夜  
五里洞ノ山後ニ於テ烽火ヲ舉ク二十八日  
午前十一時韓船一隻二名ヲ乗セテ函館丸  
ニ來リ問情ト書シタル紙片ト口陳書トヲ  
出シテ曰我朝廷齎キニ高貴ノ官貢ヲ仁川  
ニ派出シ貴國船艦ノ未意ヲ問ハシム令將  
ニ此ニ來ラントス故ニ余輩先ツ來リ就テ  
其妨碍ナキヤ否ヲ問フト我譯官ヲシテ答

ヘシメテ曰問情セント欲セハ宜ク「ホル子  
ル」島ニ碇泊セル日進艦ニ至ルヘシ是我成  
規ナリト彼悄然將ニ去ラントシ楳ノ木片  
ヲ出シ請テ曰余輩不幸櫓軸ヲ折レリ更ニ  
作ラント欲シテ工具ヲ欠ク請フ為ニ之ヲ  
作レ乃チ工匠ニ命シ作りテ之ヲ與フ彼懇  
謝シテ去ル

是日江華南口道傍ニ往タル一隻ノ脚舟ノ  
歸ルヤ一ノ韓船ニ逢フ官吏二三名アリ船  
頭ニ天蓋ノ如キ傘ヲ樹テ其下ニ虎皮ヲ敷  
テ之ニ坐シ児玉平次郎志賀清任ヲ請フテ  
其船ニ誘ヒ讓テ虎皮ニ坐セシメ今朝其属  
吏ヲ函館丸ニ遣シタル「」ヲ筆談シ須臾ニ



レテ別ヲ告ク現玉等水ノ在ル處ヲ問フ彼  
其近傍ノ島ヲ指シ彼レユニ往ケハ清泉ヲ  
得ヘレト云フ

廿九日 雲ハ風一寒暖計五ニ度 午前十一時仁禮  
大佐ヲレテ諸艦ニ布達セシメテ曰ク本日  
逃高雄ニ船ハ本艦ト共ニ大阜島ニ向テ解纜  
スヘク函館丸ハ此地ニ從泊シテ矯龍船ノ回  
ルヲ待テ玄武号ノ所在ヲ報知シ直ニ大阜  
島ニ進往セシメ猶留テ鳳翔艦ノ來ルヲ待テ  
共ニ來會スヘシト繼テ日進高雄ニ艦ハ本日  
午後一時發スヘシト同人ヨリ報シ來ル  
午後一時本艦先ツホル子島ヲ發シ午後四時  
「イムペラツリ」セ灣ニ錨ヲ下ス日進高雄踵

テ至ル  
是夜仁川江華等地方ニ數點ノ熾火ヲ見ル

三十日 雲三風一寒暖計五ニ度 午前九時十五分

韓船二艘アリ 大者飛石積程ナリ小者二十  
船ニ白布幅六寸長一尺五寸ハ旗ニ紫  
帆ニ白布幅六寸長一尺五寸ハ旗ニ紫  
ヲ裁キテ翼ノ着タル官吏二人内ニ  
古本艦ヲ距ル四五十間ノ處ニ錨ス乃テ浦  
瀬裕ヲ遣シ其船ニ上テ來意ヲ問ヒ且我カ面  
接ヲ要セバ日進艦ニ往テ待ツヘシト傳ヘレ  
ノ其名刺ヲ懷ニシテ歸リ報ス二人ハ則日譯  
院堂上官吳慶錫訓導玄昔運ナリ乃テ宮本大  
丞森山權大丞ヲ往テ接セシメ木松謙澄浦  
瀬裕陪坐ス接話數刻ニシテ歸リ報ス 使解始

リ 吳慶錫ハ屢々清國ニ往キ畧外國ノ事情ヲ  
ニ 通曉セリト云フ云昔運ハ一昨年以來釜山  
ニ 奉藏シ森山ト倭文際事宜ヲ商議ヒシ者ナ  
リ  
是日拂曉ヨリ脚舟二隻ヲ汎シ水ヲ仁川地方  
ニ 求メシハ夜ニ至テ猶歸ラス依テ又舟ヲ出  
シテ之ヲ迎フ九時十分三隻トモニ歸ル其話  
ニ 仁川濟物浦ニ上陸シ山ヲ踰ントシ顧テ砲  
召ノ迹キニ在ルヲ認メ往テ見ルニ台ハ赤土  
ニ 小石ヲ混和シテ築ユセリ田舎ノ棚麥籠ニ  
同シ砲四門アリ架車ナシ故ニ其内ニ在ル處  
ヲ 土ニ埋メ高低左右自カラ定徳アリテ復々  
動カス可ラス硝藥ヲ紙ニ捲リテ火門ニ挿ミ

火ヲ點シテ遠ク避クト云フ之ヲ土人ニ問ヘハ  
皆京地ニテ鑄造スル可シ今ハ則廢シテ用  
ヒバト答フ土民其府使ノ意ヲ以テ酒所ヲ賣  
ラシ来リ饗ス受ケス浦頭ニ二個ノ井アリ甚  
ハ夕清例故ニ後日屢々舟ヲ送テ汲マシヤ村  
民漸ク見慣テ或ハ桶ヲ荷テカヲ扶ケ薪ヲ焚  
テ暖ヲ取ラシヤルニ至レリ  
三十一日 雲三風一寒暖計五五度 午前四時水ヲ  
晴雨計三〇 仁川ニ汲リ同九時十五分孟春艦江華南口ヨ  
リ 歸ル其艦長測量船末ヲ報ス尋テ仁禮景範  
井上良馨等亦来ル  
同十一時二十分仁川汲水ノ者歸ル其土人荒  
川徳滋ニ語テ曰和艦ノ永宗城ヲ撃テヨリ荒

廢殊ニ甚シク孤兒寡婦ノ飢寒ニ泣モノ道路  
相望ニ悲慘ニ堪ヘサルナリ曰自作ノ尊我之  
ヲ如何セン

是夜仁禮景範報レテ曰高雄丸ノ小瀝艇其瀝  
羅ニ損乎アリ明日マテ修繕セシムヘシ

二月一日雲七風一寒晴計三〇八一度午前四時水ヲ

仁川ニ取ル浦瀬裕二名士官ト往テ督ス防禦  
使兼仁川府使尹映筵席ヲ擔ハセ自ラ海岸ニ  
出迎セ浦瀬等ニ謂テ曰君等ノ帶刀セラレハ  
ヲ視レハ是必ス士官ナラン士官ニシテ豈輕  
々此汲水ノ賤役ヲ執ルノ理アラシヤ又何等  
ノ可為アル曰怪ハ勿レ我大臣水夫ノミヲ發  
遣シ若レ貴地ニ於テ或ハ輕躁ヲ舉動ヲナシ

テ旧敵ヲ踏藉シ婦女子ヲ調戲スル等ノ事ア  
リテ貴官等ヲ煩スニ至ルアラン月ヲ恐レ之  
ヲ警督センカ為ノ持ニ我輩ヲ差遣セラレタ  
ルナリ曰注意ノ深キ此ニ至ルカ實ニ感佩ニ  
堪ヘスト乃テ岸頭ニ席ヲ設ケ酒肴ヲ出シテ  
饗ホントス浦瀬等之ヲ辭ス尹映曰君ト頃蓋  
如故ヲ得菲薄ノ盡餐以テ余カ歡ヲ表セント  
ス何ソ辭スルヲ須ン然レハ強テ勸ムルハ亦  
禮ニ非ス若シ碇泊中糧食缺乏ノ憂アラハ請  
フ速ニ余ニ求マラレヨ余既ニ管下ニ布令シ  
豫メ貴國ノ需ニ應スヘキ準備ヲ為サシメ貴  
國人ヲ見ハ必ス厚遇シテ禮ヲ失フ可ラスト  
諒ク諭シオキタレハ幸ニ貴大臣ニモ念慮ヲ

傍レラルル勿レト告ケラレヨト且曰予曾テ陸  
軍大将ニ任シ開港通商ノ志アリ故ヲ以テ時  
論ニ合ハス擯セラレテ廟堂ニ立ツル能ハス  
今又水軍提督トナリ現ニ二千五百人ノ兵ニ  
將タリ位從ニ品ニ班スト而ノ其兵即今ハ京  
師ニ歸ラシメタルヨシナリ  
午後三時橋龍丸江津江北口ノ測量ヲナシテ  
歸ル副大臣種田少將安田少判官永山准少佐  
セーハス等本艦ニ歸頓ス初メ談船直往ノ捷  
路ニ就テ進ム而シテ干漕ニ遇テ進ミ得ヌ回  
轉シテ漕進ス故ニ一日ノ虛費セリ其江中ニ  
在ルヤ一韓船ノ来リ近ク見ル其人曰ク問  
情ニ為我官吏今將ニ来ルアラントス妨メキ

ヤ否曰ク無シ故是安田少判官陸軍士官ト先  
ツ行テ彼船ニ上ラントス而メ適々彼開情吏  
從一有輿ニ坐シ策馬ノ属官二人ヲ從ヘ岸頭  
ヨリ船ニ移リ来リ問フ安田彼船ニ至テ應接  
レ話了ラ乃チ別ル  
二日 雲四風一寒 晴計五三度 午前四時三十分水  
ヲ仁川ニ取ル  
十一時仁禮大佐ヨリ高雄丸ノ小瀛艇修繕了  
ルノ報アリ  
午後零三十分森山樺大丞及ヒ浦瀬裕仁川ニ  
赴ク府使尹狀ニ會シテ議スル乎アリ同十時  
歸ル

三月 雲四風一寒 晴計五三度 午前九時橋龍丸来

テ石炭三萬方ヲ本艦ヨリ移シ積  
午後二時玄武函館橋龍三艦來組人員姓名簿  
ヲ仁禮大佐ニ送致ス其諸ニ應スルナリ  
四日雲三風一寒暖計四七度午前九時浦瀬裕仁  
川ニ赴ク晴雨計三〇九六會シテ議スル所アラントス  
ルナリ

午前十時諸艦「ホル子」島ヲ救錨シテ江華島ニ  
進往ス其次序左ノ如シ

第一 孟春艦 第二 高雄艦

第三 橋龍丸 第四 玄武丸

第五 日進艦

各艦皆七八丁ヲ隔テ号旗相應レ瀛烟相連リ  
午後一時三十分草芝鎮前頂山島下ニ投錨ス

其未ク臺下ニ達セサルヤ韓船二隻アリ我艦  
ニ近ツキ問情セシトスルモ、如シ而シテ諸  
艦迅速通過シテ忽焉數丁ノ後ニアリ錨ヲ下  
スニ及テ漸ク追尾シ來ル時ニ午後四時ナリ  
例ニ仍リ日進艦ニ到ラシメ森山樵大丞鈴木  
大亮ヲ差遣シテ接センヤ末松護澄書記シ荒  
川徳滋通詞タリ使鮮始末  
詳ナリ  
午後二時二十分日進附屬ノ小瀛艇ヲ發シテ  
浦瀬裕仁川ニ迎フ午後八時歸ル  
五日雲五風一寒暖計五〇度午前七時二十分森  
山樵大丞安田少判官佐藤秀頭松岡讓浦瀬裕  
ヲシテ江華府ニ向テ發往セシメ海陸軍士官  
数名亦另ニ瀛艇ヲ裝メ同行ス

午前十時仁禮大佐ニ令シ禰龍丸ヲホル子ル  
島ニ發遣シ函館丸ト交替セシム且禰龍丸ニ  
令スル左ノ如シ

一禰龍丸ハホル子ル島ニ下碇シ鳳翔艦ノ至  
ルヲ待テ共ニ頂山島ニ來ルヘシ

但來ル九月午前七時マラニ鳳翔艦至ラ  
サル時ハ左ノ手續ヲ為シ直ニ頂山島ヘ  
歸航スヘシ

一ホル子ル島上ニ号旗ヲ掲ケ其下ニ書翰  
ヲ以テ之ヲ書シ我諸艦ノソノヲラスコニ入  
レ

旗竿ニ結ヒ置クヘシ  
一南陽府使ハ口陳書ヲ具シ鳳翔艦其他日本  
國旗ヲ掲タル瀛船ホル子ル島傍迄ヘ來ラ

ハ江華島ニ前住スヘキ旨ヲ傳ヘ且島上ニ  
掲タル号旗ニ地方人民ノ障害ヲ加フヘカ  
ラサル旨ヲ告諭セシトテ依頼レ置クヘシ

午後一時十分日賀田中尉野崎中尉磯林少尉  
荒川徳滋甘利後知ヲ仁川ニ井上中尉山本少

尉及阿比留祐作ヲ草芝ニ發遣シ以テ地理  
ヲ察訪セシム同四時ヨリ十時内ニ皆還ル

等ノ仁川ニ至ルヤ府使出テ射ヲ試ムルヲ  
見タリ射ヲ十四五人皆前弓ヲ手ニシテ立ツ

巧手ヲ見ク夜坂本大尉益満少尉江華府ヨリ  
歸リ森山安田等ノ書牘ヲ出シ談地接話ノ概

畧ヲ大臣ニ報ス此行江華軍官金慶錫兩人ヲ送リ以テ草芝  
ニ來リ草芝會使端舟ヲ發シテコレヲ本艦ニ達セシタリ乃チ森山安田

贈ル書簡ヲ作リ金慶錫ニ付スル口陳書ヲ  
具シ荒川德滋之ヲ齎ラシテ草芝ニ往キ慶錫  
ニ托シ以テ江華府ニ傳致セシム

六日 雲九風ニ寒夜計三四度 午前八時ヨリ微雪  
降リ漸次霏 ヲトシテ密雪溟濛タリ午後三時

三十分歇 ヲ四山一白忽チ觀ヲ改ム  
午後一時淺山顯瓶至ル森山安田ノ書ヲ帶有

シ江華府ヨリ陸行シ草芝僉使ニ依頼シテ舟  
ヲ假リテ來ルナリ

午後七時四十五分森山安田等江華府ヨリ歸  
ル此行江華府留守趙東式又ニ接見副大官都

總府副總管尹滋養ニ面接シ我兩大臣上陸ノ  
事又ニ旅館ノ設等ヲ協議シ其月ヲトシテ先

報

スハキヲ約シテ歸レリ

七日 晴三風ニ寒夜計四八度 午後一時四十分函館丸ホ  
ルチル島ヨリ滿珠丸ヲ導キ來ル外務權大丞野

村清及ヒ小寺秀信ヲ送リ來ルナリ  
一月十七日小寺秀信ノ金山ヲ發スルヤ即日

馬關ニ上陸シ大臣付スル所ノ電信ヲ政府  
ニ發シ以テ報ヲ待ツ十九日外務權大丞野村

清命ヲ奉シ陸軍卿山縣有明ト共ニ東京ノ  
發シ二十二日馬關ニ入港シ陸軍卿ハ談地ニ

留リ野村及ヒ小寺ハ二十四日滿珠丸ニテ發  
程シ翌日嚴原ニ着ス二十九日鳳翔艦ノ馬

関ヨリ本港ニ來ルニ遇フ三十一日乃チ共ニ  
發シ即日金山浦ニ至ル而シテ鳳翔艦ハ瀛

鐘ニ損壞アルヲ以テ此ニ留リ二月一日滿珠  
 丸釜山ヲ發シ「ハミルトン」島ニ泊シ三日發程  
 シ午後四時秋子島ニ至ル五日楓島ヲ過リ  
 航路ヲ問ヒ三時四十分「ホル子」ニ來リ函館  
 丸ニ逢ヒ此日頂山島ニ着ス云  
 八日雲三風一寒暖計五五度午前三時矯龍丸ホル子  
晴雨計三〇一〇ル島ヨリ歸ル午前十時五十分森山權大丞及荒川  
 徳滋中野許太郎小林可也等日進艦ノ小漚艇及  
 哨舟ニ必需品ノ積ミ江華府ニ進  
 往ス此時儀仗兵モ亦陸路ヲ取テ談府  
 ニ到ル皆兩大臣上陸ノ準備ヲ為スナ  
 リ  
 是夜江華上陸ノ序次及ヒ儀仗ヲ定ムルト左

ノ如レ  
 一九日草芝僉使ヨリ船二隻ヲ借リ一隻ニハ  
 カットリソク砲四門ヲ載セ永山准少佐及  
 照准者四名ト砲手ノ内二十五名ヲ添ヘ  
 一隻ニハ松岡讓等十名及ヒ砲手ノ内十六  
 名來組ニ同日午後一時頂山島ヲ發スヘシ  
 同日午前八時町田實朝及ヒ甘利後知矯龍  
 丸水夫二名ヲ從ヘ草芝ニ繫キ置ケル馬二  
 匹ヲ率ヒ江華府ニ進往スベシ  
 一十日午後一時兩大臣諸隨員ノ率ヒ頂山島  
 ヲ發ス同時ニ日進諸艦ヨリ祝砲ヲ發スヘシ  
 一玄武丸ヨリ脚杖二隻ヲ發シ一ハ隨員ヲ搭  
 シ一ハ携帶諸品ヲ載セ小漚艇ニ曳カシム



一先ニ江華府ニ在ル儀伏兵並其地人負ハ干  
後一時四十分鎮海門外ニ整列シ大臣ノ到  
ルヲ待テ前後ヲ擁衛シ設府ノ公館ニ入ル  
ヘシ  
一カウトリンク砲ニ屬セル人員ハ儀伏兵ノ  
後列ヲ距ル百ヤルドノ處ニ在リテ行進ス  
ベシ

九月

雲三風ニ寒夜計三五度  
晴河計三〇〇八

午前八時町田實柄

甘利後知船ヲ發シ草芝ニ抵リ陸路江華ニ赴  
ク  
九時三十分海兵若干モ亦將ニ草芝ニ上陸シ  
江華府ニ赴カントス高雄凡其哨舟一隻ヲ抵

門ノ下ニ繫キ船艦ヨリ長組ヲ以テ緊鄰シテ  
稱カサランノ以テ海兵十六名及ヒ水夫一名  
ノ衆ス既ニシテ將ニ其舟ヲ放テ傍近ノ小流  
航ニ度シメントシ船ニ鄰リタル組ヲ弛テ適  
ク退潮ニ際シ水勢甚ク險惡組ノ弛テニ從ヒ  
舟掀動シテ激浪體ニ及フ故ニ再ヒ其組ヲ取  
テ緊張ス於是カ恐潮ニ激シ舟忽焉トシテ傾  
覆ス諸艦之ヲ視テ遠處各哨舟ヲ出シテ之ヲ  
救フ高雄ハ十一人ヲ援ヒ函館玄武ハ四人合  
計十五人ヲ扶クト雖モ憫ム可シ二人ハ終ニ  
滄没シテ其漂フ所ヲ知ラス是日震甚レク善  
洞者ト雖モ恐ラシハ手足危レテ其術ヲ施ス  
能ハス况シヤ談兵背ニ大行囊ヲ負ヒ其体目

由ナルヲ得ス而シテ又潮流迅急ノ時ニ際スル  
ヨリ午後三時ニ至ルマテ其屍ヲ探索スレド  
モ見ヘズ依テ高雄ノ士官ニ命シ其籍貫手跡  
ヲ調査セシムルニ其二人ハ

佐賀縣士族 江口麟太郎

廿二年九月

秋田縣士族 石渡駒次

十七年十月

午後一時永山准少佐四十余名ノ砲手ヲ率ヒ  
松岡讓ハ厨丁給仕等ヲ率ヒ糧食ヲ載セテ江  
華府ニ進ム

十日 晴 雲七風 二寒 暖計三八度 午後一時向大臣文  
武隨員ヲ率ヒ海兵三十名之ヲ擁護シ江華府

ニ發向ス目進諸艦砲ヲ發ス第一小流艇ハ  
脚舟四隻ヲ引キ第二小流艇ハ三隻皆日旗ヲ  
飄シテ江流ヲ泳ル水屈曲シ幅漸ク狭シ兩岸  
ノ砲台益進ノハ益多ク或ハ岸頭ニ突出シタ  
ル絶壁或ハ平坦ノ坡頭ニ堤ヲ築キ或ハ沿邊  
ノ村落ニ砲門ヲ設ク是其樞要ノ地タルヲ以  
テ觀ル可シ而テ到ル處ノ山皆兀突トシ樹木  
ヲ生セズ其鬱蒼トシテ少シク眼ヲ慰ムルモ  
ノ總々ニ舟頭ノ一山アリテ船上ニ隱見ス船  
進ムニ隨ヒ岸頭白衣ノ韓人無數奔走スルヲ  
見ルニ里余ニ諸舟鎮海門ニ着ス是ヲ江華  
府ノ南門トス此處亦胸壁四方ニ連ル少シク  
進ムハ漢江口ニ至ルニ京城ヲ距ル九七

里ト云森山樞大丞永山准少佐其他諸官眞及  
海兵砲子等皆来リ迎フ兩大臣陸ニ上テハ海  
兵樂ヲ奏シ捧銃ノ禮ヲ為シ前後ヲ護衛シテ  
三時四十分江華府副帥營ニ着ス即チ森山等  
豫メ假リテ我公館ニ備フモノナリ兩大臣官  
本大丞森山樞大丞ヲ從ヘ海兵之ヲ護シ接見  
大官申儀ノ旅館沁都通判衙門ニ至ル衛兵一  
半ヲ第二門内ニ止メ一半ヲ階前ニ整列セシ  
メ彼兩大官ニ正廳ニ接シ禮了テ直チニ歸ル  
四時三十分兩大官亦衛兵無数ヲ率ヒ遊工樂  
ヲ奏シ公館門外ニ至テ啓メ第一門ニ入レハ  
則海兵捧銃以テ禮ヲ為ス第二門ニ及テ轎ヨ  
リ下リ左右ニ扶ケラレテ階ニ上ル兩大臣出

テ接シ茶菓烟等ヲ供ス是日彼大官自袍ヲ着  
紳ヲ横ヘ雙屨四翼唐冠ト称スル者ヲ戴ケリ  
其面略スル可ハ只答禮ノニ他ニ及ハスシテ  
去ル  
午後六時浦瀨裕ヲシテ明日午後一時ヲ期シ  
公幹ノ商議ニ及フヘキヲ告ケシハ  
同時書ヲ江華留守ニ致シテ溺死海兵ノ屍發  
見セハ速ニ報知セラレシトテ依頼ス  
同八時云昔運来リ日ノ頃日京師ニ激徒アリ  
跡ヲ獲マシ脱逃セリ請フ戒嚴セラレヨト  
十一日 雲四風ニ寒夜計三四度 午前九時二十分  
晴雨計三〇五。  
差備官云濟鮮来リ我兩大臣ノ安否ヲ候ス午  
前十時三十分官本大丞小牧幹事出テ留守趙

象式ヲ訪ヒ兩大臣ノ着所ヲ報シ且旅館ヲ設  
クル等ノ特別ノ配慮ヲ謝ス

是日我紀元節ナルヲ以テ諸艦祝砲アルヘシ  
ト豫メ彼大官ニ報告ス

午後一時兩大臣官本大丞森山權大丞小牧幹  
事ヲ將テ西門内ノ練武堂ニ至リ彼兩大臣ニ

會商ス是ヲ辯理事務商議ノ始ト為ス談判了

テ酒饌ヲ饗ス

茶 梨子 生栗 乾柿 乾棗

音辨鑑トシテ堂外ニ奏ス五時帰館尋テ其

饌ヲ饋リ来ル使解始末

午後七時玄首運来ル官本大丞之ニ接ス

十二月雲 四風 一寒 夜計 四二度午前四時十五分

玄首運其大臣申儀ノ意ヲ以テ浦瀬裕ヲ已ガ

寓ニ招キ密ニ語テ曰頃日大院君腹心ノモ

兩名ニテ兩國ノ和好ヲ妨ケント欲シ同志若

干ヲ囑聚シテ京城ヲ脱レタリト在京主和ノ

大臣ヨリ使ヲ馳テ報知アリ尤モ現今物色シ

テ嚴拿ノ令アレバ不月之ヲ捕縛シテ死刑ニ

處セシ其間若シ彼黨竊發シ貴國人ニ對シテ

不敬ノコトアラハ立トコロニ之ヲ斬ラル

之弊邦ニ於テ聊カ異議ナシ其蕩平ニ歸セハ

速ニ其由ヲ報スヘシ今此事ヲ以テ君ヲ煩ハ

ス請フ貴國ノ大臣ニ陳セラレヨト乃テ之ヲ

大臣ニ報ス大臣以テ意トセス

午前九時玄首運来ル官本大丞之ニ接ス玄乃

テ彼大官ヨリ我大臣ニ贈ル黄巾五頭鶏五十  
羽ノ目錄ヲ呈ス大臣詳セシメテ曰厚意佩感  
淺カラバト云々兩國修好ノ儀未タ央ハナラ  
サルニ斯ル贈物ヲ受ルハ本大臣ノ意ニ非ズ  
使事了結ニ至ラハ自カラ贈答ノ日アルヘシ  
請フ之ヲ辭セント終ニ受ケズ此時偶談脱奔  
人ノ事ニ及フ官本曰ク今朝貴國大官ヨリノ  
警報我大臣ニ於テハ意内ニ領セラルト雖  
モ其國中ニ兇徒アリ之ヲ蕩平スルハ君主タ  
ル者ノ責任ニシテ安ソ遠人ニ波及セン然ソ  
「雖モ我大臣ハ自ラ本分ノ備アリ縱令幾百  
千ノ兇徒アルモ取テ之カ為ニ戒嚴シ其措置  
ヲ改メル等ノ一無レ可シ若レ貴國兇徒我隨

十 貴臣士等ニ對シ無禮凌辱ヲ加ムハ或ハ其兇  
暴ヲ逞フスル等ノ事アルハ是レ貴國政府ノ  
不理智ト見做サハレ可ラス事一ニ此ニ至ラ  
ハ兩國ノ交離復タ議ス可キニ非ズ我大臣唯  
國旗ヲ捲テ帰ラシメ貴國之レヲ侮トモ何  
ソ及ン我大臣ノ底意此ニアリ請フ宜シク其  
意ヲ體レ之ヲ貴國政府及ヒ大官ニ告ケラレ  
ヨ云曰フ諾語了テ去ル  
午後一時兩大臣官本森山安田小牧等ヲ將テ  
執事廳ニ至リ彼兩大臣ニ應接シ條約書草案  
ヲ示シ此般使事ノ大眼目ヲ説明ス彼レ十日  
間ヲ限リ京師ノ裁決ヲ仰カンコト請フ之ヲ  
諾ス使詳ナリ

是夜玄皆運人ヲ遣シテ條約案ヲ借覽セシ

ヲ求ル我之ヲ許ルカス

十三日 雲二風一寒 晴雨計三〇二四 午後八時三十分

仁禮大佐来リテ昨日午後二時品川瓦石炭ヲ

積テ永宗城ニ着シタリト報ス

午後一時兩大臣宮本森山安田鈴木等ヲ將テ

執事廳ニ呈リ彼兩大臣ト面議ス是ヲ第三回

ノ談判トス 使舞祭本

午後三時玄皆運吳慶錫来リ條約案ヲ漢文ニ

譯ス森山樵大丞鈴木大亮之ニ接ス

十四日 雲二風一寒 晴雨計三〇二八 午後零四十分玄

皆運来ル森山樵大丞應接ス

十五日 雲一風一寒 晴雨計三〇四〇 申憶差捕官ヲ遣

シテ兩大臣ノ起居ヲ候ス

午後零五十分吳慶錫来ル宮本大丞應接ス

十六日 雲一風一寒 晴雨計三〇四八 伊東少佐来リ非

常信号試験ノ為メ本地ト日進艦トノ兩所ニ

於テ火箭ヲ放テ以テ其互ニ相應答スルヤ否

ヤヲ驗セシトスルヲ請フ大臣之ヲ許ス

大臣孟春艦ニ命シ仁川富平等沿海ノ地ヲ測

量セシム午後四時同艦頂山島ヲ發ス

午後六時随行諸官賓ニ達スル左ノ如シ

談判ノ事件洩漏ス可ラサルハ曾テ嚴諭ス

ル所ナリ然ルニ當所ハ旅次雜沓且韓人多

賓館ニ在ルヲ以テ將ニ意ヲ用ヒ各其任ス

ル所ノ事務ヲ慎守シ嚴ニ文字散逸言語宜

洩ノ憂ヲ防クヘシ

同八時府内亭子山ニ於テ火箭三發ス九時玄  
音運来テ之ヲ詰ル蓋シ發砲ト誤認セシナリ  
乃チ浦瀬裕ヲ答ヘシメテ曰本艦ト在陸士  
官トノ間ニ行ハル信号火箭ニシテ喇叭ト同  
一般ナリ決シテ驚クヘキモノニ非ス其空ニ  
向テ放チシヲ以テ知ルヘシ彼レ諾シテ去ル  
尋テ差備官玄濟舜モ亦来テ曰昨日貴國人七  
八名小艇ヲ以テ通津ニ到リ岸上ニ白旗三流  
ヲ樹テ、去レリ吾人ノ疑懼尤モ甚クシ且我  
邦ノ制規毎夕城門ヲ鎖スハ必ス酉刻ヲ限レ  
リ然ルニ今夕貴國人三名其時限ヲ過テ江都  
南門ノ通過セリ將來此等ノ舉動アラハ甚ク

我邦ノ憂苦スル可ナレハ自今嚴訪アラシ  
テ貴大臣ニ懇請セン為メ我両大官及ヒ留守  
ヨリ特ニ下官ヲ差シタリ浦瀬裕大臣ノ意ヲ  
兼ケ出テ答テ曰通津ハ沿海ノ地ナリ其地方  
ノ妨害ニナラザル以上此ヲ航行シタリトテ  
貴國ノ取ヲ咎ムヘキ可ニアラス且本大臣等  
此地ニ駐留間ハ隨員其南門ヲ通行スル亦晝  
夜ヲ分テ難シ故ニ其之ヲ開テ出入ニ碍得ナ  
カランヤルハ貴國我ヲ遇スルノ道ナラスヤ  
請フ之ヲ貴大官及ヒ留守ニ告ケ交誼ニ悖ル  
ノ悔ナカタシメヨ玄濟舜諾シテ去ル尋テ浦  
瀬裕ヲシテ再ヒ玄音運ノ寓ヲ訪ヒ云フ火箭  
ノ事詳ニ調査ヲ經タルニ前ニ諭シタル如ク

唯一時ノ信号ニ過ス決シテ銃砲ノ類ニ非ス  
後日ニ至リ此事アルモ必ス驚擾スハカラス  
ト謀ク沼邊ノ土民ニ説諭アラントテ望ハト  
彼乃チ其厚意ヲ謝ス

十七日 雲一風一寒暖計四七度 陸軍士官二三名

漢江近傍ヲ測量ス

午前十時三十分玄濟舜来リ彼西大官及留守  
ノ意ヲ致シ昨夜伏大臣再ヒ浦瀨裕ヲ差シテ  
火箭ノ事ヲ諭スノ辱ヲ謝ス

午後七時玄昔運来リ漢江測量ノ事ヲ詰問シ  
速ニ之ヲ制止セントテ乞フ時已ニ其功ヲ竣  
レリ故ニ其請ニ應ス

十八日 雲一風一寒暖計五三度 午前八時三十分

鈴木大亮ヲ頂山島ニ派ス

仁禮大佐ヨリ報シテ日ノ高雄丸所属汽艇曾

テ沙洲ニ蕩シテ毀損セリ故ニ修理スト

十九日 雲一風一寒暖計四七度 午前八時玄昔運

浦瀨裕ヲ其寓ニ招キ議スル所アリ

十一時五十分鈴木大亮頂山島ヨリ帰ル

浦瀨裕已ノ意ヲ以テ啓相五六顆ヲ玄昔運ニ

贈ル昔運喜ブ甚シ更ニ若干ヲ請フテ其國王

ニ献セントテ欲スト言フニ至ル浦瀨裕之ヲ

安田少判官ニ謀ル乃チ裕ヲ更ニ一百顆ヲ

贈ラシメ國境密柑橙橘等ヲ産セス然ルニ其

俗冬至祭ニ當テ必ス之ヲ食スルヲ習俗トス

ルモ輒チ得可ラス唯其國王及ヒ貴族ノ之



金山官吏ニ命シテ我邦ヨリ購求シ以テ食  
スルヲ得ルト云其貴重スルヤ亦宜ナリ  
午後四時宮本大丞野村權大丞申大官ヲ訪ヒ  
議スル所アリ

二十日 晴 風一 寒 暖計 四七度 午前十時玄首運

来ル宮本大丞之ニ接ス午後二時野村權大丞  
浦瀬裕ヲ將テ申儀ヲ訪フ同五時帰館午後六  
時首運又来ル森山權大丞鈴木大亮之ニ接ス  
同七時三十分兩大臣野村權大丞森山權大丞  
安田少判官小牧幹事鈴木大亮等ヲ將テ執事  
廳ニ至リ彼兩大臣ニ接シ議終ニ恟ハサルヲ  
以テ帰艦スハキ昔ヨリ告ケ翌晚一時館ニ歸ル  
ニ波解 留末 即時野村權大丞浦瀬裕ヲ率ヒ申儀

高ヲ訪ヒ議スル所アリ歸レハ則天也ニ曉

廿一日 晴 風一 寒 暖計 五〇度 正午十二時末松

謙澄公事アリ陸路ヲ取テ玄武丸ニ至ル  
午後二時旅具若干ヲ結束シテ本船ニ送還ス  
帰艦ノ調度ヲ為スナリ  
午後三時宮本大丞森山權大丞野村權大丞鈴木  
大亮玄濟舜ニ前導セシメ申儀ヲ訪フ森山  
鈴木先ヲ歸リ宮本野村六時後ニ至テ歸ル  
此夜我哨兵兩三名アリ留守門前ヲ過グ彼番  
兵之ヲ拒ル我兵怒リ其勢ヲ呼ノ銃ヲ以テ之  
ヲ撲ツ少頃アツテ差備官留守ノ意ヲ氣ケ来  
テ戒ニ詰問ス答フルニ調査ノ上決答スハキ

ヲ以テス乃テ仁禮大佐柴山志岐二大尉ヲ喚  
テ之ヲ戒シム

野村権大丞往テ申摠ヲ訪ヒ兩大臣及ヒ諸隨  
員明旦以テ帰艦スルニ決ス

二十二日 雲四風一寒政計五六度 午前九時三十

分安田少判官我兩大臣ニ代リ往テ別テ彼兩  
大官申摠ヲ滋養ニ告グ午前十一時三十分吳

慶錫玄普運来ル尋テ彼兩大官亦来テ其帰装  
ヲ止ルニ甚切ナリ背セス但本日ヨリ五日間ハ

艦内ニ於テ貴國ノ決答ヲ待ヘレト雖トモ期  
ヲ愆レハ直ニ拔錨歸朝ス可シト彼兩大官情

然トシテ答フル所ヲ知ラサルカ如シ我兩大  
臣言了テ即テ起テ復タ他語ヲ交ヘス終ニ還

午後一時大臣江華府ヲ發シ項山島ニ還ル儀

伏兵前後ヲ擁ルテ整肅ナルニ來ル時ニ同レ

此時副大臣潛ニ本館ニ駐ル其他警留スルモ

ノ官本大丞野村権大丞小牧幹事發木大亮及

ヒ松岡讓石幡貞浦頼裕荒川徳滋小寺秀信等

及兵負若干ナリ是日亦松謙澄玄武丸ヨリ帰

ル至ル亦同ク留ル初メ我大臣ノ帰國ノ言ヲ  
發スルヤ官本大丞野村権大丞ヲレテ兩人ノ  
意ヲ以テ申摠ニ説クニ這般ノ事議若シ恊ハ  
サレハ我々意已ニ決セリ兩國ノ交際終ニ保  
ツ可ラス且ク早ニ及テ國ヲ改メヘキヲ以テ  
セシム彼意頗ル動ク大臣ノ決帰スルヲ見ル

ルニ及ンテ益憂懼措ク予ヲ知ラス急ニ吳慶  
錫玄普運ヲ京城ニ遣リ稟議スル予アリ宮本  
等ニ約スルニ五月ヲ期シテ決答スルヲ以テ  
ス是ニ於テカ人皆知ル事必ス順成ニ至ラン  
コトヲ

是日孟春艦頂山島ニ歸ル報シテ曰仁川府沿  
海水淺ク岸ヲ離ル一里許本艦近クヲ得ス  
然ル滿潮ニ際シテハ何ノ地ト雖ハ脚艇ヲ發  
シ岸ニ上ルヲ得ヘシ又曰濟物浦ニ上陸府使  
尹映ニ面シ將ニ仁川府ニ到ラントスト云フ  
彼頻ニ行ヲ止メ因テ強テ進マスト

廿三月 雲一風一寒候計五〇度 午前十一時武田  
邦太郎江華府公館ヨリ書ヲ齎シ来ル即テ彼

兩大官各包カ真影ヲ寫サントヲ依頼セシナ  
リ乃テ河田純一ヲレテ其具ヲ携テ之ニ趣カ  
レタ午後七時小林可也亦書信ヲ齎シ来ル  
江華ニテハ河田純一着齎セルヲ以テ浦瀨  
裕ヲレテ彼兩大官ニ説クニ前日貴大臣等  
話頭ノ如ク我大臣馬真子ニ命シ其具ヲ携  
テ艦内ヨリ此ニ来レリ速ニ換駕セシムハ  
キヲ以テス彼大官病ヲ以テ之ヲ辞ス  
先是我海兵ノ溺死ニ及フヤ江華府留守趙秉  
式ニ依頼シテ其死屍ノ或ハ地方ニ漂到スル  
アラハ之ヲ告知セラレンコトヲ請ヒレニ即テ  
令ヲ四方ニ下シ令ニ至ルマテ之ヲ撈索スル  
コト甚ク急ナリト聞ク乃テ於本大亮ヲ留守館

ニ遣リ之ヲ正メシタルニ設件朝命ニ出ルヲ  
以テ擅ニ中止スルヲ得ス連ニ京城ニ稟報ノ  
旨ツ乞フヘシト云フ

海兵一半ヲ頂山島ニ退カシム

廿四日

雲三風一寒暖計四八度  
晴雨計三〇三九

正午小村可也ヲ朝

鮮國王以下ハ進贈帛及公書ヲ帶領シテ江華  
府ニ赴カシム

瓊浦丸下関ヨリ至ル碇ヲ濟物浦ニ下ス飯田  
中尉使書ヲ帶テ来ル午後三時水夫二名ヲ發  
シテ東京ノ公信ヲ齎ラシ江華府ニ赴カシム  
大臣書ヲ副大臣ニ贈リ曰瓊浦丸ノ来ル甚ク  
機ニ授セリ宜ク彼ニ報スルニ我政府皆促ノ  
命アリ且又曾テ遣シ置タル儀仗兵ノ一部ヲ

送り来レリト云ヲ以テスヘシ又曰諸艦ニ令  
シテ盛ニ火箭ヲ發シ瓊浦丸ノ来着ヲ報セシ  
ムト蓋シ又為ニスル呼アルナリ

写真繪数枚ヲ彼大官及ニ留守ニ贈リ以テ  
其觀娛ニ供ス須臾ニシテ彼盡ク之ヲ還却  
シテ曰一觀ヲ得ル乃ク厚意ヲ荷フ莫大ナ  
リ敢テ其物ヲ還スト午後二時河田紀一ヲ  
シテ其邸ニ至リ留守及ニ属官ノ真影ヲ照  
寫セシム其需ノニ應スルナリ

廿五日

雲九風二寒暖計四四度  
晴雨計三〇三〇

雪降ル午前十時

三十分瓊浦丸頂山島ニ到ル同十一時其事務  
長来テ瀛羅ノ損可ヲ修補セシムヲ陳ス  
午後二時大臣森山推大丞安田少判官伊東少

佐及紫山大尉ヲ會シテ明日上陸ノ準備次序  
ヲ議ス午後四時町田實朝江華府ヨリ公書ヲ  
帶來ル於是廿七日午前九時ヲ以テ彼大官ニ  
會シ條約交換ノ議ニ決シ明日四時大臣江華  
ニ上陸ノ準備ヲ為ス

午前十一時三十分吳慶錫玄首運來リ接ス  
二人ハ昨夜京ヨリ歸來ト云フ朝鮮政府ハ  
總テ我ノ議スル所ニ應レ結約スルハキヲ報  
シ其齎ラシ呈ル所ノ條約書ニ議政府謝  
辭ノ旨本ヲ示ヤリ午後八時吳慶錫開行シ  
テ副大臣ノ寓舎ニ來リ談話久フレテ歸ル  
廿六日雪一風一寒夜計五二度午前九時議シテ  
勝田大尉ヲシテ昂川丸ヲ以テ歸國シ太政大臣

及ヒ山縣陸軍卿ニ報セシムルニ條約成ルハ  
レトノ事ヲ以テセントス

同十時諸艦ヲノ餘ス所ノ韓銃ヲ滿珠丸ニ移  
積セシム之ヲノ在釜山浦我公館ニ輸送セシ  
ムルナリ

午後一時三十分大臣文武隨員及ヒ儀仗兵ヲ  
率ヒテ頂山島ヲ發シ小湊船ヲ以テ再ヒ江華  
府ニ進往ス同四時着館

午後二時瓊浦丸板鎚ノ頂山島ヲ發ス  
約成ルニ至ラハ該國君主ニ進呈セント擬ス  
ル因轉砲ノ試驗ヲ為サント先ツ彼大官ニ照  
會シ以テ其人ヲ簡點シ來リ就テ其彈發ノ方  
ヲ傳習セラレシムヲ望ム其人來ル乃チ練武

堂前ニ鵠的ヲ設クル一ニ弩相乘ル百間乃至  
二百間ニシテ八十發其中ニ者六十餘發ナリ觀  
ル者歎賞セザルハナシ其他短銃ノ方法等悉  
ク之ヲ傳フ

廿七日 雲一風一寒暖計五。及 午前九時兩大臣

隨員種田少將官本大丞祥山中佐森山權大丞  
安田少判官小牧幹事鈴木大亮及ヒ石幡貞浦  
瀨裕荒川德滋等ヲ率テ大禮服ヲ着シ儀仗兵  
前後ヲ擁シ館門ヲ出ツ道路觀ル者堵ノ如シ  
鼓笛喇叭以テ衆ヲ整ヘ練武堂前ニ蒞ル堂ハ  
西門内ニアリ民家ヲ聚ル一教丁ニシテ垣牆  
ナク門戸ナク田圃間ニ兀然タリ我邦ノ僻陬  
村落ニ廢頽ニシ佛堂ニ彷彿タリ其三面ニ幔

幕ヲ張キ一方ヲ缺テ出入ノ門ト為ス門ノ兩  
側ニ兵士樂工排列シ兩大臣ノ來蒞ルヲ待テ  
樂一闋ニ彼兩大臣出テ階前ニ迎テ既ニ堂ニ  
上レハ中央ニ卓ヲ設ケ油紙ヲ以テ之ヲ覆フ  
其左右ニ椅子アリ皆虎豹ノ皮ヲ敷ク此堂三  
面共ニ壁ナク其正面ハ屏風ヲ以テ遮レリ兩  
大臣及ヒ隨員ハ禮畢テ左座ニ就キ彼兩大臣  
及隨員ハ右ヲ占ム而シテ通譯ハ正面ニ立ツ於  
是互ニ条約書ニ印ヲ鈐シテ交換シ而シテ其國  
王批准及ヒ議政府ノ謝辭ヲ受領シ次ニ贈答  
品目錄ヲ交遞ス  
贈品左ノ如シ

國王ハ

回轉砲

壹門

附彈藥貳千發

前車一輛

緋絹

貳匹

白絹

貳匹

六連短銃

壹枝

附彈藥一百發

七連銃

貳枝

附彈藥貳百發

袖珍裝金時辰表 壹個

附金鑲壹條

晴雨計 壹個

磁針 壹個

接見大官申

裝金刀 壹口

六連短銃 壹枝

附彈藥一百發

紫絹 壹匹

鑲金銅靴 壹對

國史畧 壹部

續國史畧 壹部

續國史畧後編 壹部

馬 壹匹

酒 壹樽

接見副官申

裝銀刀 壹口

六連短鏡

壹杖

附彈藥一百發

紫綉

壹匹

七寶瓶

壹對

國史畧

壹部

續國史畧

壹部

續國史畧後篇

壹部

馬

壹匹

酒

壹樽

江華府留守趙

七連銃

壹挺

附彈藥一百發

海氣絹

壹匹

紅絹

壹匹

日本外史

壹部

酒

壹樽

訓導吳

刀

壹口

海氣絹

壹匹

日本外史

壹部

丁銅

壹百斤

酒

壹樽

訓導玄

刀

壹口

海氣絹

壹匹

日本外史

壹部



丁銅

貳百斤

酒

壹樽

從事官洪

海氣絹

貳匹

紅絹

壹匹

日本政記

壹部

烟草

拾束

接見大官隨員徐、姜、尹、譯官玄、李及、草芝、鎮

金使洪六名

紅絹

各壹匹

海氣絹

各壹匹

烟草

各拾束

留守屬官李以下三名及、將校崔

海氣絹

各壹匹

烟草

各拾束

執事林

烟草

拾束

譯官李

海氣絹

貳匹

紅絹

壹匹

烟草

拾束

彼國王ヨリ我兩大臣

四書

各壹帙

詩箋

各伍卷

色筆

各壹百柄

彩墨

各伍十丁

白細芋

各拾匹

白絹細

各拾匹

接見兩大官ヨリ狀兩大臣ハ

大綴子

各三匹

白綿細

各拾匹

白芋布

各拾匹

白木綿

各貳拾匹

虎皮

各三令

各色筆

各壹百柄

真墨

各五拾丁

各色紙

各伍卷

色團扇

各拾柄

別摺扇

各拾柄

真梳

各參同

官本大丞森山權大丞野村權大丞安田少判  
官小收幹事鈴木大亮ハ

大綴子

各貳匹

虎皮

各貳令

豹皮

各壹令

白絹細

各拾匹

白芋布

各拾匹

白水綿

各拾匹

各色紙

各三卷

黃筆

各伍拾柄

真墨

各三拾丁

別摺扇

各拾柄

浦瀬四等書記生荒川六等書記生中野六等書記生ハ

大綴子 各壹匹

虎皮 各壹令

白綿細 各伍匹

白苧布 各伍匹

白木綿 各伍匹

各色紙 各三卷

色團扇 各三柄

真梳 各壹同

江華府留守ヨリ我両大臣ハ

生鷄 壹佰首

鷄卵 壹仟個

大綴子 壹匹

白盆細 三匹

細綿布 五匹

虎皮 壹領

花紋席子 貳立

鈴印及ヒ贈答畢テ宴ヲ設ク其薦享スル可ク  
肴饌ハ十一月ニ畧同ニ故ニ復記サス事務全  
ク了結シテ午後一時三十分帰艦諸艦長皆来  
リ賀ス宮本野村鈴木及ヒ松岡小林甘利等猶  
留ツテ旅館ノ事ヲ結束ス

午後三時鈴木大亮留守ヲ訪テ其滞在諸  
般厚意ヲ首尾周便ニ歸シタル謝辭ヲ致シ  
且明日早朝ニ借供スル可ク百需ノ物品ヲ

返却マシトス約ス

廿八日 晴 雲一風一寒 暖計五三度 官本小一鈴水大

亮及松同讓等午前四時旅籠及ヒ借具ヲ江華  
府執事ニ還了シテ三十名ノ役夫ト雜品等ヲ  
將テ午前九時本艦ニ歸ル 於是這般事務全ク  
了マリ

午前十時頂山島碇泊ノ諸艦皆枚錨ス中野評  
太郎及ヒ韓語生徒七名ヲ滿珠丸ニ乘セ命ヲ  
帶テ釜山ニ往カレハ

廿九日 晴 雲一風一寒 暖計五五度 天霽レ風恬ニシ

テ船駛ル一矢ノ如シ午前其先ヲテ發スル  
函館呂川橋龍日進孟春ノ諸艦ヲ超過ス

三月一日 晴 雲二風一寒 暖計六四度 午前八時對川

巖原外洋ヲ過シ午後二時十五分六連島畔ニ

東京丸ノ長崎ニ往クニ過ル午後三時三十一

分馬関ニ枚錨ス開拓中判官堀基等此ニ在リ

艦ニ未テ大臣ヲ迎フ午後四時三十分兩大臣

上陸シテ豊永号ニ慰ヒ大臣ハ十時三十分副

大臣ハ午夜ヲ過テ歸艦

此夜一時三十分本船急潮ヲ為ニ流移セラレ

込傍ノ商船ニ衝突シ共ニ毀損アリ

二日 晴 雲三風一寒 暖計六三度 午前四時枚錨天氣

晴朗水波穏ニシテ進往頗ル疾シ

三日 晴 雲三風二寒 暖計六三度 風強フシテ頗ナリ

一時間平均十有二海里ヲ走ル快進此ノ如キ

ハ此艦ノ希ニ遭フ可ナリト云フ

四日 晴 三時二刻 渡 午前十時 品海ニ達

ス向大臣及随員上陸シ開拓使ニ會シテ復命式ノ整フルヲ待ツ初メ馬關ヨリ電線ニテ明

五日 歸朝ト報セリ其路ヲ計ルニ尋常ノ船舶明日ニ非レハ品海ニ入ルヲ得サルヲ以テナ

リ而テ此艦快駛非常加ルニ風順天晴故ニ數時間ノ航路ヲ縮メタリ是其式未タ整ハサル

ヲ以テナリ安田定則正院ニ抵リ西大臣ノ歸朝ヲ報シ乃チ其復命式ヲ兼テ歸ルル如左

一 三月四日 式部頭命ヲ奉シテ横濱ハ出張

一本日 正院ヨリ馬車一輛横濱ハ差廻シ置

一 五日 辨理大臣ノ乗車ニ備フ

リ直ニ式部頭談艦ニ出迎ス

一 辨理大臣着艦ノ旨式部頭電信ヲ以テ正院ニ報知ス

一 小蒸氣船海軍省ヲ以テ辨理大臣以下ヲ迎フ辨理大臣以下随行者ト共ニ上

陸馬車前日正院ヨリニ置キテ休所ニ着ス大藏省出張

一 大臣休所ニ於テ辨理大臣ヲ迎ラル

一 辨理大臣以下ニ酒饌ヲ賜フ

一 辨理大臣何時ノ瀛車ニテ入京ノ旨式部頭電信ヲ以テ正院ニ報知ス

一時 列大臣辨理大臣以下列車中別ニ設クル乎ノ三輛ノ瀛車ニテ新橋鐵道館ニ着

ス

一同呼<sub>歩兵大隊</sub>ニ儀仗兵騎兵小隊整列騎兵ハ途中  
護衛歩兵ハ同呼整列

一時刻大臣辨理大臣副辨理大臣等御料ノ馬  
車ニテ正院ハ參入巡查途中非違ヲ監ス

參官式

一辨理大臣副辨理大臣正院臨御 御門ヲ  
乘車、俟參入正院前庭ニ於テ下車

一主上正廳階上ニ於テ辨理大臣ヲ迎ハ給  
フ階上南ノ方ニ大臣參議大史式部頭等  
列ス宮内卿侍從等御後ニ候ス

一主上辨理兩大臣ヲ率給<sub>内閣</sub>ニ入御  
御對面勅語ノリ大臣式部頭候ス畢テ入

御辨理大臣退ク

一更ニ出御辨理兩大臣ヲ召シ復命ヲ聞食  
サル大臣參議外内務大藏陸海軍省長官

班列ス床ヲ賜フ畢テ入御退出

一大臣休テニ於テ祝酒ヲ賜フ三職接待ス  
一辨理兩大臣玄關ヨリ退出騎兵大臣ノ郎

近護衛途中巡查非違ヲ監ス

此式成ルニ先夕ナ兩大臣ハ刻チ既ニ着セリ  
故ニ翌五日兩大臣更ニ新橋鐵道館ニ到リ其

陰遇ヲ辱フス當日式内ニ排列ナル大臣及諸  
員ハ勿論東京人民總代等迎ハ慶スル者最モ

多ク市街毎戸國旗ヲ掲ケ以テ萬歳ヲ唱フ是  
ヨリ參官

聖上内閣ニ於テ 御對面アリ 勅語左ノ如

シ 朕汝清隆馨等ヲ朝鮮國ニ派遣スルヤ負ハレ

カレニ重任ヲ以テス 汝等黽勉克ク其使命ヲ

全クシ新ニ條約ヲ互換シ以テ兩國ノ好ヲ為

セリ朕甚ク之ヲ嘉ニス

兩大臣肅拜シテ退ク 諸儀總テ参官式ノ如シ

使鮮日記 畢

Blank lined page for writing.

950

鈴木大亮秘藏

45628



